
COBALT-SERIES
聖石の使徒
前田珠子
狩人の宝
集英社



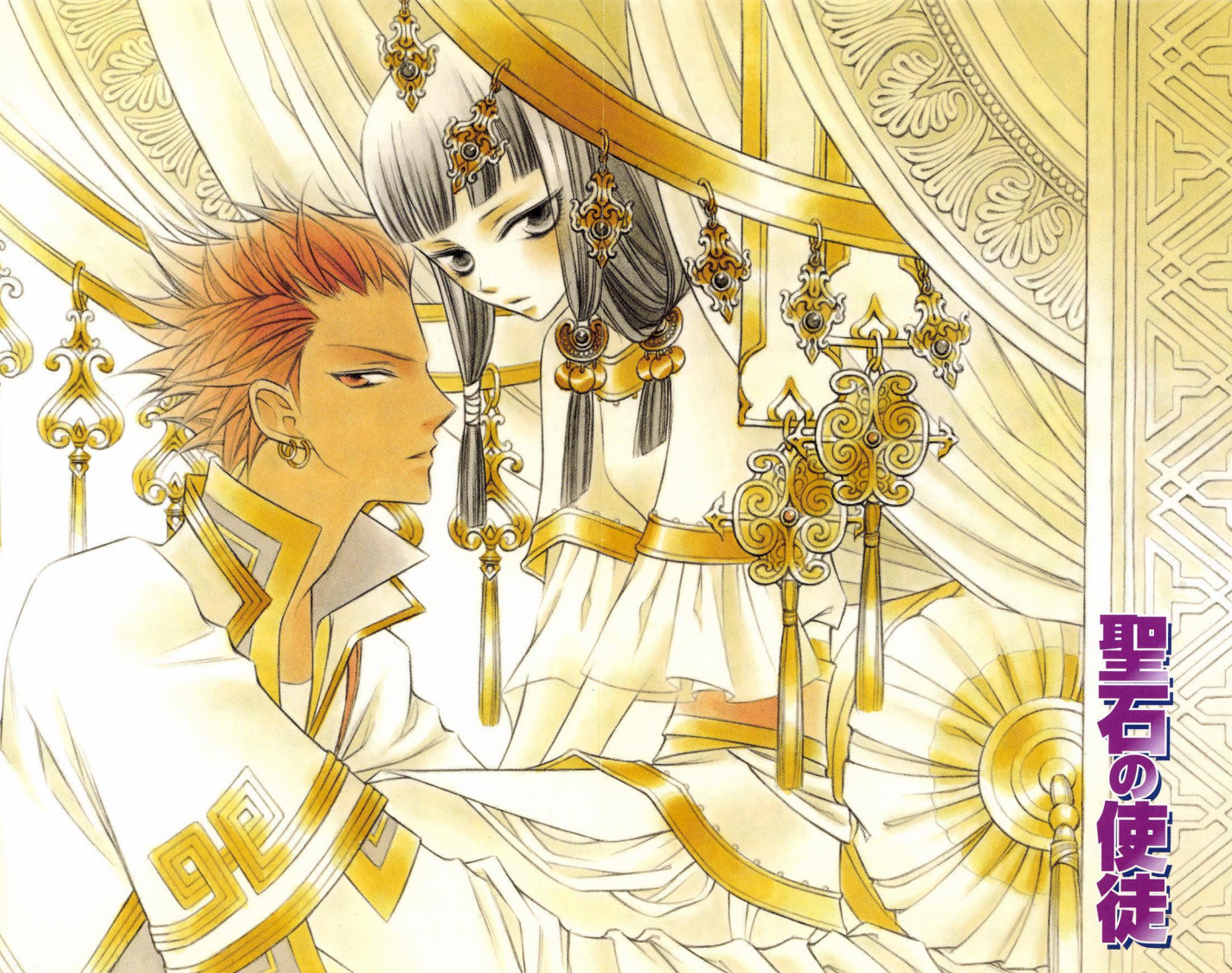
COBALT-SERIES

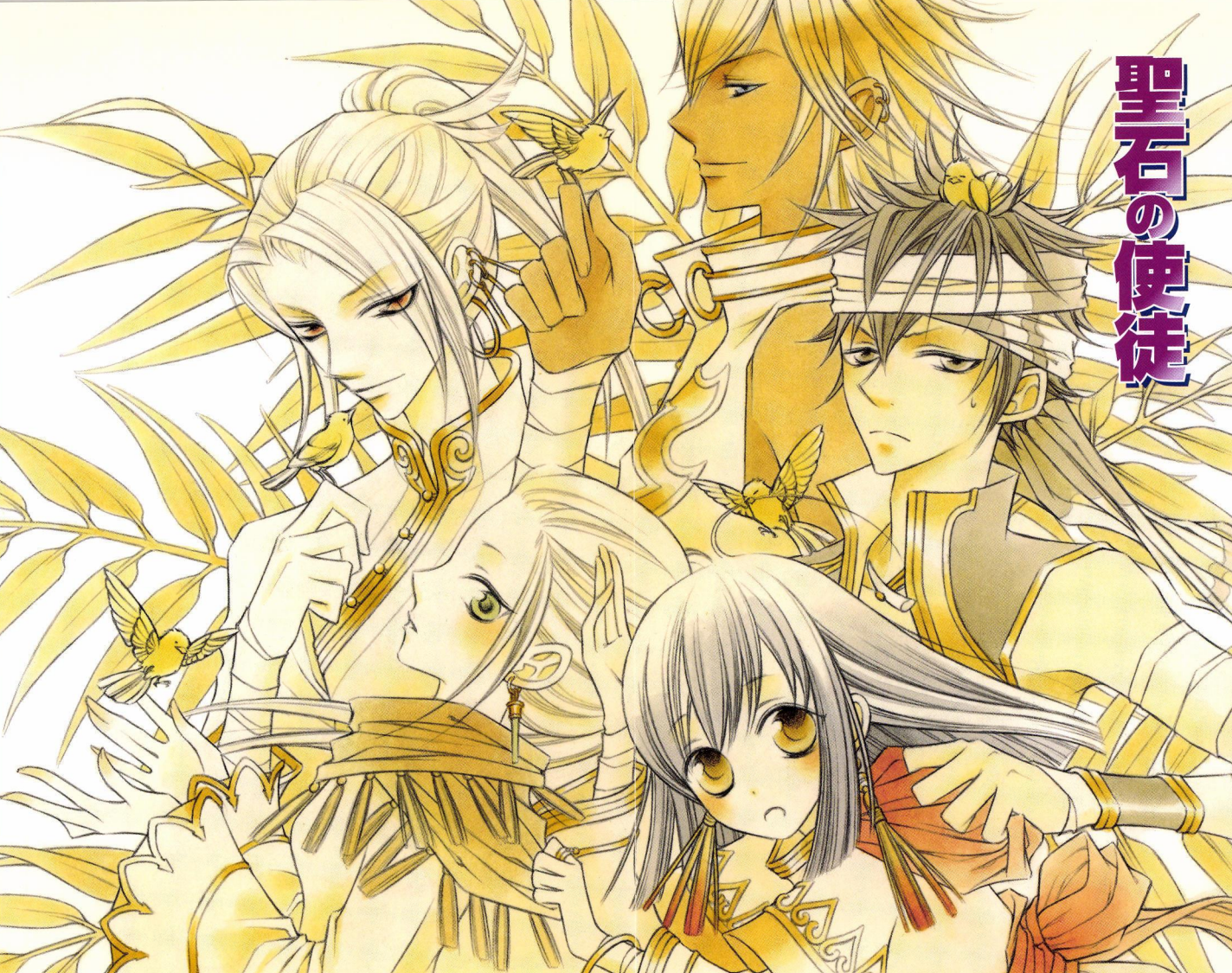
聖石の使徒

狩人の宝

前田珠子

集英社


聖石の使徒


聖石の使徒



COBALT-SERIES

聖石の使徒

狩人の宝

前田珠子

集英社

目　次

聖石の使徒
狩人の宝

狩人の宝……13
あとがき……205

聖石の使徒 これまでのあらすじ

万能の至高神セイトーリによって創造された世界、バルヴァローズ。この世界に生じた瘴気を浄化するため女神は眠りにつき、その眠りを守るため、聖石の使徒は誕生した。『聖石の子供』と呼ばれる使徒候補の子供たちはみな、持って生まれた聖石と同じ石を生み出したり、その石を用いて薬湯を作ることができた。彼らは、能力を使いこなす教育を受けるため、一定年齢に達すると最寄りの神殿内における『学校』に入ることになっていた。

石墨を抱いて生まれたアークは『聖石の子供』だったが、いつも失敗ばかり。しかしある日、瘴の女神の目覚めを妨げるために、優等生のミイノとともに珊瑚の使徒（セイとカーラ）を手伝うよう命

じられる。劣等生の自分がなぜそんな重要な任務についたのか釈然としなかったアークだったが、生死の境目に追い込まれた時、無意識に凄まじい力を発揮、その潜在能力を明らかにする。その後、アークは力を制御する方法を学ぶため、修業を続けることになる。

今回は、そんなアークの師匠、カーラとセイの過去の物語。

あまりに篤い水の加護を受け性が未分化だったカーラは、瘴気を宿しやすい体質のせいで神殿に閉じ込められていた。やっと見つかった相棒セイも、辛い過去ゆえにカーラとコンビを組みたがらない。しかし懇願するカーラに、「女にならないと約束するなら組んでもいい」とセイは答え、二人は晴れてコンビに。しかしその願い空しく、カーラの性は遂に女性に確定してしまう。セイはカーラを神殿に戻そうとするのだが、ある仕事を引き受けてしまい!?


イーダルド
行方知れずの兄貴分を探している。怪我をしていたところをセイタマールに助けられた。
伽羅（カーラ）
黒珊瑚を抱いて生まれた聖石の子供。女性にならないことを条件に、セイタマールとコンビを組んでいたが…。
セイタマール（セイ）
血赤珊瑚を抱いて生まれてきた聖石の使徒。伽羅の相棒。

聖石の使徒■登場人物紹介



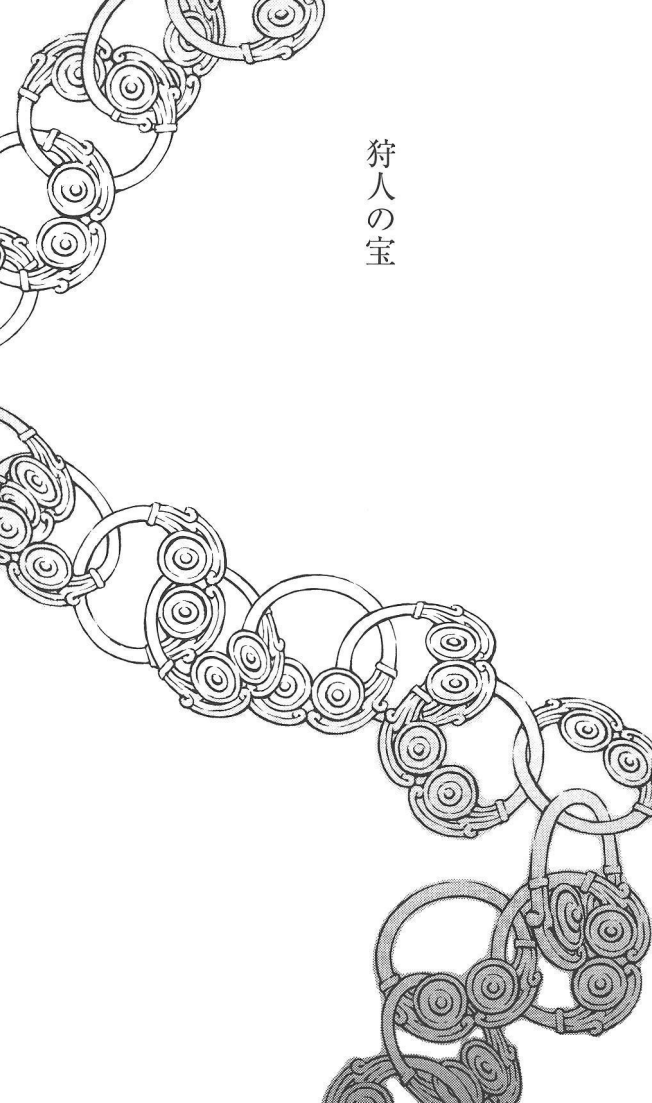
ガネルオージェ（ガネル）
稀有な存在である金剛石の子供。師匠である青玉の使徒に絶対的な信頼を寄せていたのだが、ある事件をきっかけに破門を言い渡される。

アラクセイト（アーク）
石墨の子供で、火神の加護を受けたイイタールの娘。自分の能力を完全に制御するため、日々努力しているが…。

ソラミイノ（ミイノ）
砂金水晶の子供。アラクセイトの同級生で親友。兄を捜すため、家を出て旅をしている。

イラスト／山本鳥尾

狩人の宝



1

細長い音叉が漆黒の石に触れた瞬間響いた音を、サンネイドは決して忘れないだろうと思った。

金属と鉱物――そのふたつがぶつかり合って生まれた音は、甲高いだけのものではなかったのだ。

音は空気を震わせながら伝わるもの――知ってはいたけれど、それを心底実感したのはこれが初めてのことだった。

リィーン……リィィン……ィィィン。

生まれた澄みきった音が、波を描きながら空間いっぱいに広がっていく。

音の清水に洗われて、体だけでなく心までが軽くなるのがわかった。

（すごい……）

たった一音だ。

石と音叉が触れ合って、生みだしたただひとつの音。

それが空間全体を覆い、そこに集う全員の心身を洗い清めたのだ。

演奏が始まる前の、好奇心に満ちたざわめきは、この一音だけで完全に消え去った。

奇跡の連音奏者――。

邪気までも浄化する聖なる音の使い手。

演奏会を知らせるポスターにあった謳い文句は大袈裟で、正直サンネイドも本気にはしていなかった。

演奏者は隣国白谷の出身だという。この響波ほど音楽が盛んな国ではない。

他国で名を馳せた演奏家であろうと、響波人を唸らせるのは難しい――響波で認められれば真の一流だと認められる反面、認められなかったら二流の烙印を押されてしまう。

だから、よほど自信がなければ、他国の演奏家が響波で活動しようとは思わないの

だ。

それは上流階級の客に限定してのことではない。

国中に音が溢れる響波の民は、音楽を愛するがゆえに皆例外なく素晴らしい耳の持ち主なのだ。下町の酒場であろうと、下手な演奏は許されない。

そんな、自分たちの耳に絶対の自信を持つ国民であるから、この場に集まった者たちの多くは、大袈裟な煽り文句を笑ってやるつもりだったに違いない。

「他国ではどうかは知らないが、この響波で『奇跡』だの『聖なる音』などと銘打つことが、いかに危険な行為であるか、思い知らせてやろう」

演奏が始まる前に、そんな意地悪いことを囁く声を、サンネイドは確かに聞いていた。

彼自身、そこまでは思わなかったが、評判倒れの演奏で落胆することにならなければいいのだが……ぐらいのことは考えていた。

そもそもこの演奏会のチケットは、彼が買ったわけではない。

最近鬱ぎがちな彼のために、先輩の神官が用意してくれたのだ。

『聖石の子供である以上、使徒を目指すのは当たり前かもしれないけれど、使徒になれなければ意味がないということはないはずだよ。聖石を抱いて生まれてきたこと自体が大変なことだと思うからね』

聖石の子供でないそのひとは、使徒になれそうにないことで落ち込んでいたサンネイドに、そう言ってこの演奏会のチケットを差し出したのだ。

『この演奏家は神殿の玉響の浄化にヒントを得たという話だ。邪気祓いにどれだけ有効かはわからないが、君の気鬱の虫ぐらいは退治してくれるんじゃないかな』

本音を言うなら、そんな気分ではなかったが、先輩の心遣いを断るのも心苦しかったので、サンネイドはチケットを受け取り、そうして今夜の演奏会に足を運んだのだ。

それでも、それは言うならば義務感からの行動であり、演奏そのものには欠片の関心も抱いてはいなかった。

彼は自分のことで精一杯だったのだ。

自分が天河石の子供であることを、サンネイドは七歳になるまで知らなかった。彼が施設前に捨てられていた時、彼は天河石を抱いてはいなかったのだ。

何も知らぬままに育ち、七つの頃、初めて聖石の子供石を生み出したのだ。
そのことを知った施設の長メイファンが、弦歌の神殿に報告したことで、彼は聖石の子供としての人生を歩むことになった。
聖石の使徒や子供がいかに特別な存在かは、広く世間に広まっている。
七歳のサンネイドにとって、自分がその一員であることは、世界のためにも、一緒に育った施設の子供たちのためにも、素晴らしいことだと思えた。
自分の子供石で、誰かを助けることができる。
子供石を神殿に引き取ってもらうことで、施設の運営にいくらかでも協力できる。
だから、自分は精一杯頑張って、立派な聖石の使徒になるのだと心に決めた。
けれど――。
本来抱いて生まれてきたはずの聖石を持たぬサンネイドは、どれほど集中しても小指の先ほどの子供石を生み出すのが限界だった。
しかも天河石を薬湯にするのにも苦労させられた。天河石に含まれる微量の鉛をうまく取り除くことができなかったのだ。

生まれ落ちる時に抱いてきた聖石があれば、そういうことはないのだと聞いた。

聖石は聖石の子供の半身であり、導き手であり、同時に最良の相棒なのだと――だからそれを持たないサンネイドが大成することは難しいと、気の毒そうに彼に宣告したのは、ちょうど弦歌の神殿に立ち寄った芭蕉国籍の使徒だった。

呆然とした。

抱いて生まれてきた聖石を持たぬ自分は、では決して使徒にはなれないのだ。それどころか、聖石の子供としてすら不完全な存在なのだ。

じわりと黒い雫が胸の内に落ちる。

小さな黒い染みが、少しずつ広がっていく――修業がうまくいかなくなる度に、その染みは大きくなっていく。

努力しても無駄なのだと、心の中から声がする。どう足掻いても自分には目指す場所へ辿り着くことはできないのだと。

絶望と苦悶が胸を苛んだ。自暴自棄にならなかったのは、自分の荒んだ姿を同じ街の施設の弟妹たちに見せるわけにはいかないと自制が働いたからだ。

メイファンが施設長を務める弦歌の養育施設には、十人以上の弟妹たちがいる。自分を信じ慕う彼らを悲しませるような真似をするわけにはいかない。

特に――。

『ネイちゃん……』

自分の後をいつもついて回っていた小さな弟の顔が脳裏に浮かぶ。

自分が神殿に移る時、一緒についていくと地面に転がって駄々をこねた弟は、二日とおかずに手紙を書いてくる。最初の頃こそ、戻って来てほしい、自分がいないと淋しいと、泣き言めいた言葉の羅列が綴られていたその内容も、今ではこちらを気遣うものになっている。

弟に弱みを見せるわけにはいかないから、落ち込んだりしてもそんな素振りは返事に書いたつもりはないというのに、どこか鋭いあの弟はなぜかこちらの気分を見えない行間から読み取ってしまうのだ。

最近の手紙にはあれが楽しかった、これも面白かった、修業の合間の気晴らしには絶好だ――等々と、こちらの気分をもり立てるようなことばかりが書いてある。

他愛のない内容ばかりだが、弟の一所懸命こちらを元気づけようとする思いが伝わってきてサンネイドは正直少し苦しい。

お前が思っているほど、ことは簡単じゃないんだよ。

目の前にいたら、きっとそう言ってしまうだろう。弟の無邪気な信頼と尊敬の眼差しに、心地よさでなく苛立ちを覚える日が来るなどと、以前は考えたこともなかった。

あの目に今の自分の姿を映したくない——映した挙句、心に溜まったどろどろしたものを見抜かれたりしたら、きっと自分はあの弟を許せなくなってしまう。情けないのは自分なのに、八つ当たりで弟を憎んでしまうだろう。

そして、そんな醜い自分の心の動きをさらに嫌悪してしまうのだ。

現実は現実として認めなければならないのだと、頭ではわかっているのだ。捨てられた時、自分の聖石は永遠に失われてしまったのだ。その時、すでに自分が使徒になる道は閉ざされてしまっていた……。

今になってこんな思いを味わうぐらいなら、いっそ自分が聖石の子供だなどと知らなければよかったとさえ思えてしまう。

守り石にもならない小粒の子供石しか生み出すことができず、それを薬湯にすることもできない。何の役にも立たない能力など、目覚めなければよかったのだ。

そうすれば、自分は普通の子供としてメイファンのもとで育ち、地道に働くことで施設を支えることを躊躇うことなく受け入れただろう。

苦しい……考えれば考えるだけ、胸のなかにどろどろしたものが溜まっていく。認めなければならないのに、誰かのせいにしてしまいそうだ……。

そう、こんなチケットを用意してくれた先輩の神官さえも——聖石の子供としての挫折がいかなるものかも知らないくせに、親切面して好意を押しつけて……その気遣いこそが自分を追い詰めるのがなぜわからないのか、と思いそうになるのを止められない。

なんて自分は醜く弱いのだろう。

こんな心の弱さでは、きっと半身の聖石がそばにあったとしても、使徒になどなれなかったに違いない。

自己嫌悪と自己否定——他者の好意を歪めて受け止める自分を許せず、心はどんど

ん苦しくなるばかりだ。
（こんな自分はいやだ）
そう思うのに、いやでない自分にどうしたらなれるのかがどうしてもわからない。
（いやだ……苦しい……いっそ何もかも捨ててしまいたい……）
そんなことばかり考えていた。
それが——たった一音で変えられたのだ。
澄み渡った音色——音は優しく波を描き、空間を満たしサンネイドの体を通り抜けると同時に彼の内側にも新たな波を起こした。
リィィン——リィィィン。
同じようで違う波が、サンネイドの心身を震わせ、清めていく。
音楽が心に大きく作用することはもちろん彼も知っていた。
だが、連なることもない単音が、これほどの力を持っているとは考えたこともなかった。
（すごい……本当に、すごい）

体内に広がった音の波の最後のひとつが、すう、と体の外側へ抜けていくのを感じた瞬間、見計らったように、奏者が第二の音を放った。

今度は真紅（しんく）の石と、先ほどより少し短めの音叉によるものだ。

チリィィン……リィィィン。

第一の音より少し高い、やはり澄み切った音が広がる。

だが、奏者は今度はその音が消えるまで待たなかった。素早く橙色（だいだいいろ）の石に持ち替えると、同じ音叉に軽く触れ合わせた。

その次は黄色、その次は緑——青、紫、白、透明……そしてまた漆黒。

それぞれに微（かす）かに音程の違う音を組み合わせながら奏者は美しい音の連なりを生み出していく。

漆黒の石が奏でる音は、足裏から流れ込んでくる力強さを備えた響き、緑の石の奏でるそれは、胸の奥まで届き震わせる。

橙色の石は下腹部に力が集まる響きを放ち、白い石は額から頭頂部にかけて何かを開くような不思議な力を持っている。

また、色だけでなく石の種類によっても放たれる響きはそれぞれに違い、複雑な波紋が空間に広がるのだ。

（ああ……）

あまりの心地よさに、サンネイドは思わず目を閉じた。

石の色や種類を追うのが無粋に思えてしまうほどの陶酔感――それと同時に、彼は確かに自分のなかのどろどろした思いがするすると解かれていくのを感じた。

劣等感や絶望、苛立ち、自身を含む現実そのものへの嫌悪や焦燥――そうしたものが、音が響く度に不可視の水に溶けてどこかへ流れ出していく。

（音の連なりに、こんな力があるだなんて知らなかった）

先輩の神官が言った通りだ。

この音に、邪気を祓うような強烈な力は感じない。だが、自分のなかで膨れあがった、自分でもどうしようもないどろどろしたモノをいともたやすく洗い流す――まさに、気鬱の虫を退治してくれる。

奏者が用いているのは何の変哲もない――ように見える――数種類の音叉と貴石や

半貴石である。

奏者自身にも、聖石の使徒のような特別な気配は感じられない。

聖石の子供としての能力など持たずとも、人間はこのような力を揮うことができるのだ——優しく包みこむような響きでもって、ささくれだった心を癒すことができるのだ。

（そうだ）

と、改めてサンネイドは思った。

音を楽しみ、それを伝えることは特別な才能を要するものではないのだ。

音楽を愛し、音の連なりを愛し、そこに籠もる奏者の思いを音ごしに感じ取る。

もちろん一流と呼ばれる奏者の演奏は特別だ。魂までも震わせる音色を奏でる彼らもまた選ばれた一握りの人間である。聴衆全ての心を鷲摑みにして旋律の海に心地よくたゆたわせる才は誰にでも与えられたものではない。

けれど、この音は——石と音叉が奏でる美しい音の連なりは……。

心地よい音を連ねるためには構成にかなり頭を使わなければならないだろう。石と

音叉の組み合わせにも細心の注意が必要に違いない。そうしたことをひとつひとつ積み上げて、編み上げなければこんな効果的な連音は紡げない。

だが、それはきちんと組み上げれば音楽の神に愛された者でなくとも、人間の心に響く音色を奏でられるということだ。

日々の貧しい暮らしに疲れた心や、疑心暗鬼に陥った魂――言葉をいくら尽くしても、そうした心を抱えた人たちの意識を前向きに導くのは難しい。

だが、この方法なら。

石と音叉の奏でる音を効果的に組み合わせる技術をこの手に修めることができたなら……そうしたら。

もう、自分は出来損ないの聖石の子供だという思いに悩まされずにすむのではないか。

そう思った瞬間、サンネイドは再び目を開いた。

心地よさに酔っている場合ではないと思ったのだ。この音の秘密をひとつでも多く感じ取って帰らなければならない。そう考えれば、視覚を封じるなど愚の骨頂だった。

どの石がどの音叉との組み合わせでどんな音を生み出すのか――。

ひとつでも多くの情報を集めるべきだ。これは盗むと言い換えてもいいかもしれない行為だった。

だが、人前で演奏する以上、この奏者もそれぐらいのことは覚悟しているはずだ。職人が弟子に懇切丁寧に教えたりしないのと同じで、演奏家は独自の奏法を盗まれる覚悟で披露するはずなのだから。

サンネイドは目を凝らして、舞台上の奏者の指先を見つめた。

そして、はっと息を呑んだ。

何の偶然か――奏者の手にあったのは、明るい空の色をした石だったのだ。

（天河石）

サンネイドが抱いて生まれてきた石だ。

微量の鉛を含むために、薬湯にするには不向きとされ、専ら守り石として珍重される石なのだ。

（天河石……あれは一体どんな音を……）

奏でるのだろう――という彼の疑問は、直後に舞台上の奏者によって答えを得ることとなった。

チリィィン……リィン。

音叉と空色の石が触れあったかと思った刹那――。

生まれた音色――広がる波紋。

サンネイドは届いた響きに脳裏に広がる春の青空を視た。

まだ幼いころ、自分が聖石の子供だということも知らず、「ネイちゃん」と慕ってくる幼い弟と一緒にみた空の青。

施設の子供たちは皆、貧しい暮らしを当たり前に思っていた。メイファンが懸命に金策に走っても、施設を運営するに充分な寄付を集めるのは難しく、空腹や寒さから解放されることはなかった。

それでも。

冬の寒い夜はメイファンを囲んで皆団子のように固まって寒さをしのぎ、知り合いの食堂から野菜残りをもらっては全員に行き渡るように食事を工夫していた。

そうして厳しい冬を乗り切って、春がやってくると、みんなで明るく色を変えた空を見上げたものだった。

（ああ、そうだ……思い出した）

自分のすぐそばには、小さな弟がいつもいた。

自分のそでを小さな指でにぎりしめながら、弟はひもじかったことや寒かったことなどまるで忘れたかのような顔で、本当に嬉しそうに明るい春の青空を見上げて言ったのだ。

『ネイちゃん。綺麗だね。お空が本当に綺麗だね』

夏の鮮やかな青さには到底及ばない、おぼろげな……霞むような青い空を、それでも弟は嬉しそうに見上げるのだ。

当時の自分は『そうだね』と答えながら、ようやく厳しい季節が終わったとしか感じていなかった。

今、天河石の生み出す響きを肌で感じるまで、春の青空を弟のように純粋に「綺麗」と感じたことはなかったように思う。

けれど――脳裏に広がる明るい水色の空。
おぼろげなのではなく、包みこむような優しさに満ちた青。
こちらを急かすことなく「ゆっくりとでいいんだよ」とでも言いたげな、穏やかに芽吹きを促す響き。
「さあ、目覚めの季節だ！」
大地が水が空気が……世界中が、そう叫ぶ声までもが聞こえるような気がした。
心が浮き立つ。
全身が賦活される。
（ああ、ああ、ああ）
その音色に身を委ねながら、サンネイドは知らず涙を流していた。
天河石――自分の聖石。
守り石にも満たない大きさの子供石しか生み出せず、薬湯にもできないことで疎んじていた自分の相棒。
だが、それは自分の勝手な都合で責め立てていただけのことなのだと、今この時、

はっきりと悟った。

（お前は……こんなにも愛しい春の青空を思わせ、人々に希望をもたらす石だったのに）

たとえどんなに小さくとも、伝える内容は同じはずで、自分はそれを信じればよかったのだ。

そうすれば、自分の生み出す子供石が小さいだとか、薬湯にするのが難しいだとか……肝心なところを抜かして枝葉の不足ばかりに目を奪われることはなかったに違いない。

もっとも、それはこの演奏会を経験したからこそ思い至った境地であり、そうでなければ自分はいつまでも……それこそ永遠にでもぐずぐずと思い悩んでいたかもしれない。

そのことを考えると、サンネイドは先輩の神官に感謝せずにいられなかった。

お節介にしか思えなかった自分の狭量さを心底恥じた彼は、しかし新たに見つけた目的に邁進するのに迷うことはなかった。

演奏会が終わると同時に、彼は奏者の楽屋に押しかけた。
無礼は承知だった。
それでも、どうしても訴えずにはいられなかったのである。
石と音叉であの奇跡のような音色を奏でたひとに――聖石の子供石でもない天河石で、響波の春の青空を自分に見せてくれたひとに。
技術や奏法を盗むとか、そういったことは頭からはじけ飛んでいた。
願うのは――欲するのは、ただひとつきりだった。
「お願いです！　わたしを弟子にしてください！　わたしはあなたが奏でるような音を奏でたいのです！　天河石が宿す春の青空を！　砂金水晶が抱える夏の緑を！　大地と空が歌う世界の歌を宿した音色を、わたしは石たちに歌わせたい！」
これ以上はないというほど心をこめた訴えに、演奏を終えたばかりの奏者は驚きに目を瞠った。
そうして数瞬――沈黙の後、そのひと――亜麻色の髪と榛の瞳を持つ女性はくすりと笑みを零して答えてくれたのだ。

「わたしは、興行用の張り紙にあったような特技の持ち主ではないわよ？　わたしは師のような特別な力は何も持たぬ奏者に過ぎないわ。それでも弟子になりたいというの？」

問い返すその内容は、演奏会のポスターに書かれた内容が大袈裟すぎるものであることを暴露するものだった。

だが、サンネイドにとって、そんなことはすでに瑣末なことだった。

あの青空を見せてくれたのは、誰とも知らぬ奇跡の連音奏者などではなかった――舞台で優雅に音叉と石を奏でた目の前のこの女性なのだ。

このひとこそが、自分の中に渦巻いていた泥のようなぬかるみを解いて水に流してくれたのだ……彼にとって、それこそが全てだった。

だから、はっきりと頷いた。

「あなたに……あなたにこそ、わたしは教えを請いたいのです。どうか、わたしに石と音叉が生み出す音色をご教授ください！　わたしは……わたしが視たあの青空を、わたしだけではなくひとりでも多くのひとに視せたいのです！」

必死に訴えたにも拘わらず、そのひとはその場で返答することはなかった。
それどころか、次に劇場を訪れた時にはすでに彼の人は弦歌の街を去っていた。
そのことは、少なからぬ衝撃と落胆をサンネイドに与えた。あれほど必死に訴えたことはない——なのに、躱すように彼の人が姿を消したと言うことは、自分の望みがかなわぬことと無言で知らしめようとしたのではないかと思ったのだ。
あなたに、その才はない。
はっきり突きつけることを彼の人は避けたのではないのだろうか。
そう思うと、一度は晴れた胸の内のどろどろが、以前以上の濃度でもって湧き出るような気がした。
駄目なのか。
自分では駄目なのか。
あの澄み渡る音色を生み出すのは、自分では無理なのか。
こんなどろどろしたモノを内に抱える人間には、石と音叉で澄み渡る音色を奏でることはかなわないのか、と。

悶々と思い悩む日々が続く中、サンネイドの宿舎に施設の弟からの手紙が届いた。

内容はいつもと変わらぬ自分を気遣うものだった。

ただ、最後の数行がいつもとは違っていた。

『ネイちゃん。格好悪いけど、暖かくなって油断しちゃって風邪をひきこんで寝込んでしまったよ。おかゆ作ってもらったり、体拭いてもらったり……もう、お母さんや姉さんたちに面倒かけて御免っていうか。でも、熱出してぼーっとしてる時に懐かしい夢を見たよ。いつのことだか思い出せないけど、一緒に空を眺めたよね。春の空で綺麗な空色だってしかおれは思わなかったんだけど、ネイちゃんは何か別のこと考えてるみたいだったよね』

あの時ネイちゃんは何を考えていたのかな――？

素朴な……素朴すぎる問いかけに、サンネイドはあの演奏会で思い出した春の青空を心に浮かべた。

子供だったあの頃、春の青空は自分には当たり前で、当たり前すぎて何を感じさせるモノでもなかったように思う。鈍感だったのだと思う。

当たり前に感じることが、どんなにかけがえのない大切なモノであるのか、あの時は感じることさえできずにいた。
そうしてありがたみがわかったような出来事に遭遇しても……全然摑み取ることはできないのだ。
心を洗う音色に出会った。
あんな音を自分も奏でたいと思った。
だから必死に訴えかけた。
なのに、躱された。
それは、お前には無理だと宣告されたも同然だと思った。
諦めるしかないのかと——諦めるように自らに言い聞かすしかないのかと。
だが——違う。
以前の自分と今の自分は違う。
あの春の空の色——あれはこれから色を違えて夏へと色彩と気配を変えていく。
『ネイちゃん頑張れ！』

声にならない声が聞こえたような気がした
とん、と背を押されたような気がしたのだ。
だから、サンネイドは今ここにいる。
白谷の佳山（かざん）の一画に。
音叉と石をいかな柔らかさで触れ合わせるか――。
そのことのみに集中して。
今、在（あ）れる――。

2

白谷の王都朱句――騒ぎが起こったのはその南地区でのことだった。

突然身なりの良い女性が天を仰ぎ、引きつったような悲鳴を上げたのだ。

何事かと通行人が振り返るなか、女性の悲鳴は次第にしわがれた別人のものとしか思えない怨嗟の声に変わっていった。

常人にはわからないその奇怪な行動を、しかし聖石の子供にして神聖真名を授けられた黒珊瑚の子供――伽羅は正確に読み取った。

女性には、どす黒い強烈な邪気が絡みついており、彼女はそれに支配されようとしていたのである。

邪気は人間が生み出した負の感情が凝ったものだ。

妬み辛み、恨みに憎悪――特に憎悪の割合が大きなその邪気は、女性の命を脅かしかねない強い負の気を放っていた。

邪気に意志と呼べるものはない。

触れてしまった人間をその依巫とし、目的を果たすために肉体を支配しながら、相手の心身を気遣うことがない。

使い捨ての道具のように、触れた人間を扱うのだ――刻まれた目的を果たすためだけに。

その邪気の核となっているものは、強い怒りと憎悪。

刻まれた目的は――ある対象への復讐だった。

『殺してやる、殺してやる、殺してやる！』

その強さは、女性の口から溢れた言葉以上のものだった。

理不尽に殺された恨みをこのままにしておくものかという執念と……決意。

聖石の子供の中でも気配に敏感な伽羅にとって、それは吐き気を催すほどの恐ろしい凶気だった。

あんなモノに支配されていては、いつ命が尽きるかもしれない。
伽羅は考えるより先に動いていた——まあ、多少は考えたが、それは後付けの要素が大きい。その時所持していた聖石の子供石の中に活用可能なものがあったのは偶然の賜でしかない。
だが、それは伽羅の持つ運というものだったのかもしれない。
彼女は懐からそれ——爆裂水晶の子供石を取り出すと、悲鳴を上げて暴れ始めた女性の手に握らせた。
爆裂水晶とは、水晶が結晶を構成する途中で地震や地殻変動によって一度崩壊したものが再度結晶化したもので、通常の水晶以上の力を秘めている。
だが、この一見ヒビだらけの水晶には特筆すべき効果がある。
それは、持つ者の周囲の負の気を一気に引き受けるという点だ。
持ち主に集う悪い気を爆裂水晶は吸収し、その代わりに亀裂が消えていくのだ。
持ち主の願いを叶えるにあたり、それを妨げる悪い気を吸収し、願いの成就がなった時には透明になる——ということも言われているが、今回のそれはそれには当ては

まらないだろう。

なぜなら。

邪気の支配から解放され、意識を失った女性の右手を、伽羅はそっと握りしめ、力の抜けた指を開いた。

現れたのは、先ほどまで無数のヒビが入っていたとは到底信じられない透明そのものの水晶だ。

ヒビが入ろうとも崩れず再び結晶化した力はそこには感じ取れない。

女性を脅かす邪気を吸い取ることによって、爆裂水晶は完全に無力化していた。

これが天然の爆裂水晶なら伽羅がここまで沈鬱な思いを味わうことはなかったろう。

だが、彼女が女性に咄嗟に握らせた石は、芭蕉の神殿を去るにあたり、餞別として副神官長シイレートルが贈ってくれたものだった。

聖石の使徒が生み出した子供石なのだ。

生半な邪気で無力化するなどあり得ない。

そのあり得ないことが起こったのだ——聖石の子供石が完全に無力化するほどの邪

気の源がこの街に存在しているとしか思えない。

女性を支配しかけていた邪気だけは、何とか退散させられたが――それはつまり、本体は残されたままだということだ。

使徒が生み出した子供石を完全に無効化させるだけの邪気の塊は、依然この地のどこかに息づいているのだ！

その根源を突き止め、浄化しないことには、この女性を襲った悲劇は何度でも繰り返されることだろう。

その度に伽羅が助けられる保証はない。

那八を目指す彼女の相棒の存在がある以上、あと何日この朱句にとどまれるのかもわからないのだ。

いや、と伽羅は思った。

（セイを説得できないことはないはずだ。このひとに取り憑いた邪気は、確かに『使徒にはなれなかったけれど』と洩らしたのだから）

行方の知れぬ聖石の子供たちの探索を、セイは那八の地神神殿神官長オサラディー

ンから命じられているのだ。

本来その任務は伽羅も含めたふたりに命じられたものであるのだが、伽羅の肉体が女性に変化し、固定してしまったことを知って以来、相棒であるセイタマールはその件に彼女を関わらせようとせず、一刻も早い那八への帰還を目指しているのだ。

その理由の大部分は伽羅を思ってのことだということも、わかっている。

黒珊瑚を抱いて生まれてきた伽羅は、篤すぎる水の加護を受けている。それが危険をもたらすのだ。

海神アイルトーリは、嫉妬と憎悪のなかで息絶えたふたりの月神たちの影響を強く受ける女神なのだ。その加護篤く生まれた聖石の子供――特に女性も同様で、珊瑚や真珠の使徒や子供は喪月神の放つ瘴気に侵されやすい。

特に伽羅は瘴気を一度我が身に取り入れることで浄化するという特殊な浄化法を行うため、危険は他の仲間より大きいのだ。

喪月神の瘴気――月瘴気に侵された聖石の使徒や子供はそのまま喪月神の傀儡と化す。世界を破滅に導く最悪の駒となってしまう。

それゆえに伽羅は祖国である芭蕉のアスカニーリ神殿では常に危険視されてきた。外に出して活動させることで、万が一にも月瘴気に触れたりしたら取り返しがつかないと、神殿から出させまいとする動きがあったほどだ。その頃伽羅の性別は一定期間ごとに変化していたにも拘わらず、だ。

性別が女性に固定化したことを知られれば、芭蕉の神殿は今からでも彼女を連れ戻しに来るかもしれない——今度こそ、神殿の奥深く、決して月瘴気に触れる危険性のない場所に彼女を隔離するために。

セイタマールはそれを案じているのだ。

閉鎖的な芭蕉の神殿と違い、那八の神官長オサラディーンは、伽羅を閉じ込めようとは思っていない。那八の地神神殿に入りさえすれば、二度と伽羅が芭蕉の影に怯える必要はなくなるのだ。

だから、急いでいる。

それはわかるのだが——それとこれは話がまた違う。

（あの邪気は死者のものだった……）

心ならず命を摘まれた者の怨念が凝り固まったモノだった。

『使徒にはなれなかったけれど』

そう洩らしたあの邪気は、恐らく殺された聖石の子供なのだ。

ぞくりとするものを感じる——摘まれた命——行方の知れない聖石の子供たち。

必ずしもあれがその子供のひとりだとは限らない。

だが——。

殺されて恨みを抱えた聖石の子供が少なくともひとりはいるのだ。そして、その邪気の源はまだこの街に残されている……。

（放ってはおけない）

到底見逃すわけにはいかない事態だ。

放置しておけば、きっと恐ろしいことが起きる。それは瘴気を封じるために、この身に受け入れつづけてきた伽羅だからこそわかることだった。

（何とかして、セイを説得しなければ……！）

邪気と瘴気を浄化することで、瘴の女神の眠りを守る——。

それが自分たち、聖石に選ばれた者の務めなのだから！

石畳（いしだたみ）に倒れ込んだ女性のそばで、ぺたりと座り込んでいる伽羅の姿を目にした瞬間、セイタマールは頭痛に襲（おそ）われた。

この朱句の神殿で、渡された追加任務の内容だけでも頭痛の種としては充分だったというのに、なぜこの黒髪の相棒は次から次へと自分を悩ませてくれるのだろう。

宿に戻る道すがら、息せき切って駆けつけてきたイーダルドから大体の事情は聞いたから、彼女を責めるわけにはいかない。

だが、彼女に罪がないだけに、頭痛は大きくなるのだ。

（どうして……）

この子供――いや、もう娘だと知ってはいるが――は危険な状況に首を突っ込まずにいられないのか。

いや、危険が向こうから彼女に近づいてくることはわかっている。他愛のない程度のものであれ、命を脅かすものであれ、危険や厄介事は目指したように彼女に降りかかるのだ。

大抵はそれらは不可避なものであり、伽羅に非はない——自身の容姿に対する無頓着さが引き寄せる危険に関してだけはそうとは言い切れないが。

ただ、問題なのは伽羅がそれらの事態から決して逃げようとしないことだ。

邪気や瘴気が絡んでいるなら尚更のことで、その度に自分は心臓まで痛くなるというのに、当の本人ときたら、こちらの心痛など知らぬ顔なのだ。

今回のことにしたところでそうだ。

イーダルドから事情を聞いた瞬間、セイタマールは血の引く思いを味わわされた。

邪気に触れて混乱し、暴れる女性に単身近づくなど、自分の体格をまるきり考慮していないとしか思えないではないか。恐慌状態に陥った人間は、たとえ相手が子供でも侮れない力を揮うものだ。

それを、十六歳にしては小柄でしかも細い体で、どうにかできると——どうして伽

羅が信じられるのか、その根拠がわからない。
イーダルドから聞いたところでは、どうやらセイタマールの最大の懸念は杞憂に終わったようだが、にしても無茶のしすぎというものだ。
（まったく……）
近づく自分に気づいたらしい伽羅の漆黒の双眸を見つめた瞬間、彼は盛大に顔を顰めた。
彼女の眼差しが、明らかに変化していたのだ。
昨日……否、出掛けるまでの彼女の目ではない。自分でどうしようもないことだったというのに、女性化してしまったことでセイタマールに罪悪感を覚え、言いたいことを充分に言いきることもできずにいた彼女ではない。
その磨き上げられた黒珊瑚そのものの瞳には、今、強い意志の光が宿っている。
心を決めた目だ。
決して譲れぬことを見つけた目だ。
伽羅があの目になってしまったら、もう翻意は望めない。彼女はここというところ

では、決して譲らぬ頑固さを持っているのだから。

それが自分自身の損得や功名心に根ざすものなら、年長者として頭ごなしに潰すこともできるだろう。年少者の未熟さがいかに危険を招き寄せるか、セイタマール自身我が身で味わってきたことだ。

『思い上がるな』

『無謀と勇気をはき違えるな』

そう叱りつけ、動きを封じることもできるだろう。

だが、伽羅の場合、それはできない。

彼女は——出会ったころから変わらず、いつも自分ではない誰かのためにこそ必死になる。危険をものともせず事態の渦に飛び込んでいく。放っておけない自分はこの二年、そんな彼女の背中を守るために駆け回らされたようなものだ。

だから、わかる——わかってしまう。

伽羅は、何かを……見つけてしまったのだ。そうして、走ると心に決めた。

あの眼差しはそういうことだ。

（仕方ない）

ああなった伽羅をひとりきりには到底できない。

自分の心は変わらない――オサラディーンの命令など無視してでも、一刻も早く彼女を那八に連れ帰りたい。

だが、この想いは彼女の抱えるそれの強さには及ばないに違いない。

（仕方ない……）

もう一度、こっそり胸中で呟くと、セイタマールは黒髪の少年にしか見えない少女に向かって足を進めた。

こうなっては、「一刻も早く」の部分だけは諦めざるを得ないのだと――この二年ほどのつきあいのなかで学んだことを噛みしめながら、彼は大きなため息を洩らした。

「セイ……」

石畳の上に座り込んだまま、見上げてくる少女に、セイタマールは冷ややかな声をかけた。

「何をしてるんだ、お前は。さっさと立て。まさか腰が抜けて立ち上がれないと言う

んじゃないだろうな？　いくら俺でもその女性に加えてお前まで運ぶのは遠慮したいぞ」

途端にくしゃりと歪む伽羅の表情に、自分の声はどうやら本音を隠し切れたようだと、内心安堵しながら、彼は意識のない女性を抱き上げるために、その場に膝をついた。

（そう……譲歩はする。こうなったらするしかない）

自分に言い聞かせるように、彼は声なく続ける。

だが、譲るのはこの女性に関する件だけだ。それ以外は――何一つ譲るつもりはない。

伽羅を那八に連れ帰り、オサラディーンの保護下に置いたら――そうしたら。

コンビは解消だ。

自分の決意を確かめるよう胸中で呟くと、セイタマールは意識を女性に切り替えた――。

大人って謎だ。

宿に戻って、しみじみとイーダルドはそう思った。

オズローン・ナージエの演奏会に出かけた伽羅のことを、ただ宿で待つのが苦痛で、街に出たのは気晴らしを兼ねた時間つぶしだった。

けれど、以前伽羅と回った弥琴（やきん）より、王都である朱句は大きな街で、珍（めずら）しいものもたくさんあるのに、ちっとも時間は潰（つぶ）れてくれなかった。

理由はわかっている。

街のどんな珍しいものよりも、黒髪の少女が持ち帰ってくれるだろう情報を自分が望んでいるからだ。

オズローン・ナージエ。

奇跡の連音奏者。

邪気さえ浄化する聖なる音色の奏（かな）で手。

突然姿を消したイーダルドが兄と慕うひとの行方を知っているかもしれないひと。

多分間違いない、とイーダルドは思っている。

なぜなら、それと似た謳い文句を彼は故郷の弦歌で見た覚えがあったのだ……そう、見た時は大袈裟な文句に「響波人の耳を舐めるなよ」と鼻で笑ったものだった。

一枚の興行用ポスターの前で。

その時は気にも留めなかったし、あのひと——サンネイドから興奮を隠しきれない様子の手紙を受け取った時もそれとは結びつけて考えたりはしなかった。

だって、あのポスターの煽り文句は子供のイーダルドにとってすらあまりに陳腐だったのだ。

奇跡の奏者？

聖なる音？

少なくともイーダルドの知る限り、そんな文句を掲げた奏者が本当にそんな音を奏でた試しがなかったのだ。

実力がない者ほど、大仰な文句で客の気を惹こうとする。

それは響波では暗黙の了解とされる現実なのだ。

だが、あの奏者に限ってはそれは真実だったのだろう、とイーダルドは思う。

そうでなければ、サンネイドがあれほどに夢中になるはずがない。彼の耳は自分と同じくらいに良かったのだ。まやかしや誤魔化しのはったりに騙されるわけがない。

だからきっと――サンネイドはオズローン・ナージエを追いかけて、弦歌を飛び出したのだ。恐らくは弟子にしてもらうために。

その奏者が、彼を弟子にしてくれたかどうかはわからないけれど、きっと何かを知っているに違いない、とイーダルドは確信していた。

なぜなら、彼が知る限り、本気で何かに没頭したサンネイドほど、しつこく粘り強く諦めの悪いひとはいなかったからだ。

一度や二度断られたところで、諦めるようなひとではない。

門前払いを喰らったところで、三度や四度や五度や六度でへこたれるようなひとではない。

サンネイドの粘りに打ち勝てた人間を、今のところイーダルドはひとりしか知らな

いのだ。たとえその演奏家が彼の要望に応えることがなかったとしても、そこまでした相手のことを忘れられるとは思えない。

（だから、きっとちいちゃんが帰ってきたら、何かがわかるはずだ……）

期待に胸を膨らませるイーダルドは、気配というものに敏感すぎる伽羅が、オズローンの楽屋に押しかける人波の凄まじさに、早々に白旗を揚げて帰途についたということを知らなかった。

そのまま何事もなかったら、期待が大きく膨らんでいただけに、何の情報も持ち帰らなかった伽羅に対して怒りをぶつけていたかもしれない——が。

事態はそうは動かなかった。

気もそぞろに街をうろついている内に、それなりに時間が経過していたのだろう——イーダルドは突然聞こえた空を切り裂く悲鳴にはっと息を呑んだ。

若い女性のものだった。

周囲はまだ明るい。

こんな時刻だというのに、聞こえてきたのは切羽詰まった女性の悲鳴だ。

何事かと思わなければ嘘である。

咄嗟に悲鳴のしたほうにイーダルドが駆け出したのは、決して野次馬根性に因るものではなかった。

お母さんこと施設の長メイファンから、常々言い聞かされていたからだ。

『あなたたちはまだ小さいから無理をしてはいけないけれど、いいこと？　大人になったら、自分より弱いひとたち……そうね、小さな子供とかか弱い女の人が困っていたら、絶対に放っておかない人間になりなさい。間違っても、見て見ぬふりをして、自分は悪くないと言い訳するような大人にだけはならないでちょうだい』

この後に、『ただし、わざわざ危険を被ることもないから、用心深く対処するための頭を今の内に鍛えておきましょうね』と奥深い内容が続くのだが、現時点のイーダルドにそこまでのことはできない。

だが、義母の薫陶――の一部――はしっかり心に刻み込まれているイーダルドが、動かずにいられなかったのは仕方ない。

そして、悲鳴が起こった現場に駆けつけた彼は、自分以上に危なかしいくせに、同

じ行動に走った少女の姿を見いだしたのだ！

悲鳴はすでに悲鳴ではなくなっていた。

先ほど聞いた女性のものとは思えない、怨嗟（えんさ）に満ちた低い声が空気を染め変える勢いでまき散らされていた。

『やめろ！　放せ！　放せぇ！』

『邪魔をするな！　殺してやるぞ！』

それは、若い女性の姿を借りた、何か別の存在だった。

声に宿る憎悪と怨嗟はイーダルドがこれまで耳にしたこともない強さで空間を震わせ、その濁った力で染め上げていく。

（なんだ、これ……なんだ、この……怖い空気は……？）

こんなものを感じるのはイーダルドにとっては初めてのことで、何が何だかわけがわからなかった。

だが、そのわけのわからない事態の中心にいるのが、見知ったひとだというのなら、他人事と片付けることなどできない。

そう――その騒ぎの中心にいたのは。

「この石を握って！　大丈夫だから！」

暴れる女性の左手に必死に縋りつきながら叫んでいたのは、あれほど帰りを待っていた伽羅だったのだ！

その後の女性と伽羅の遣り取りも、伽羅の行為の意味もイーダルドには理解できなかった。

ただ、女性が力なくその場に倒れたのとほとんど同時に、その場に座り込んでしまった伽羅を見たらもう黙ってはいられなかった。

「ちいちゃん！」

叫んで、駆け寄って、「大丈夫？」と問いかけるつもりだったのに。

それより先に、伽羅に頼まれ事をされてしまった――セイタマールという名の使徒の青年を呼んできてほしい、と。

伽羅の瞳に切迫したものを感じたから、イーダルドは従うことにした――勿論、あとでしっかりじっくり事情は聞かせてもらうつもりで。

そうして、セイタマールを宿に戻るまでもなく見つけて、見聞きした限りの情報を伝えた上で伽羅の言葉を伝えたのだ。

その時のセイタマールの顔は、これまでイーダルドが目にしたこともないものだった。

一瞬にして血の気の引いた顔で、セイタマールは「どこだ」と掠れた問いを——血走った目で放ってきた。

気圧されたイーダルドが「あ、あっち」とようやく答えると、あっという間に駆け出した。

人間があんなに恐ろしい気配を放ち、さらには素早く動けるなど、イーダルドはこれまで知らなかった。正直なところを言えば、その迫力たるや腰が抜けるほどだった……実際は、呆然と立ち尽くす程度であったけれど。

怖かった。

恐ろしかった。

これまで、大人が本気で怒ったとしても、あれほど恐ろしいと感じたことはなかっ

た。セイタマールの背中が視界から消えるまで、その怒気に縛られ、身動きひとつできなかったのだ。

（なんて、恐ろしい……）

そう思わなかったと言えば嘘になる。

あれが、使徒さまの本気の怒りなのか。

だとしたら、使徒とはやはり普通の人間とは違いすぎる存在なのだ、とそう思った。

けれど、その一方で。

イーダルドは笑い出したくもなったのだ。

（なんだよ、なんだよ兄ちゃん）

ちいちゃんにあんなに冷たく当たっていたくせに。

ちいちゃんが落ち込んでも放っておいたくせに。

なのに、ちいちゃんが危ない目に遭ったって聞いただけでそんなに血相を変えるのかよ。

血相変えて飛び出してくほど……ちいちゃんのこと大事に思ってるくせに。

（なんで、素直に伝えないのかなぁ……）

と、そんなことを考えて。

これで事態は少しは良い方向に向かうに違いない――とイーダルドは思ったわけなのだが、これが大変な誤算であることを、彼は宿に戻るなり思い知らされることとなったのだ。

朱句で取った宿屋の一室。

寝台には未だに意識が戻らない件の女性。

その両脇を守るように伽羅とセイタマールが椅子に腰掛けていた――というのが、宿に戻ったイーダルドが目にした光景である。

因みに、その際交わされていた会話の内容と言えば、だ。

「それで、何がわかったと？」

氷のような冷ややかな声で問いかけるセイタマールと、

「オサラディーンさまが下された任務と関係があるかどうかはわからないが、確実にひとり、殺された聖石の子供がいる。この女性に憑いていた邪気は間違いなくその子

のものだ。放っておくわけにはいかない」

こちらは無理矢理感情を押し込めたような声で答える伽羅で。

堅苦しいまでの両者の間に流れる緊張感は一向に改善された様子の見えないものだった。

イーダルドは叫びたくなった。

（何でふたりとも本音を隠すんだよ！）

セイタマールを呼んできて、と必死な面持ちでイーダルドに告げた伽羅から感じたのは、相棒に対する絶対的な信頼だった。

事情を聞くなり血相変えて飛び出していったセイタマールの背中に感じたものは、かけがえのない相棒を失うまいとする必死の思いだった。

なのに、いざ本人同士が向き合うと、そんなものがかけらも感じられない無味乾燥なやりとりしか交わされないのだ。

大人ってなぞだ。

最初に感じた感想を、イーダルドは訂正した。

（大人になるって、面倒臭（くさ）い）

3

意識を取り戻した女性はナスキーア・フォルスと名乗った。
金茶のくせのない髪と灰色がかった青い瞳の、優しげな表情が似合う女性だった。
恐らくは気性もその通りなのだろう、そうした人間はその優しさゆえに邪気や瘴気につけ込まれることが多いのだ。
だが、彼女は先ほどの記憶を持たず、なぜ自分が見知らぬ人間に囲まれているのかと、最初酷く怯えた様子を見せた。
もし、その場にセイタマールだけでなく、伽羅とイーダルドの姿を認めなければ、悲鳴を上げていたかもしれない——言っては何だが、不機嫌なセイタマールは強心臓の主でもなければ近づこうとは思えない空気を発散しているのだから。

そんな彼女に、声をかけたのはイーダルドだった。
彼は自分が子供であることを、最大限に利用して、ナスキーアの警戒心を解いたのだ。
「お姉ちゃん、街中で突然悲鳴を上げて倒れたんだよ」
しわがれた別人の声で怨嗟の言葉を吐いたことは、ひとまず伝えずにおいたのは、彼女の混乱を鎮めるのが先だと判断したせいだ。
施設で多くの子供たちと一緒に育ったイーダルドは、そういった機微に通じていたのだ。
ナスキーアが驚いたように目を瞠る。
どうやら本当にその時のことは覚えていないらしい。
「悲鳴を……？　そんな……」
記憶を探るようにゆっくりとかぶりを振る女性に、イーダルドがさらに続けた。
「お姉ちゃんがどこのひとか、周りの誰も知らなかったから、ちいちゃんが兄ちゃんに頼んで宿まで連れてきてくれたんだよ。お姉ちゃん、この辺りのひとじゃないの？

家はどこ？」

　これが大人の口から出されたものであれば、ナスキーアは素直に答えなかったかもしれないが、子供が相手ということで、素直な言葉が返ってきた。

「ああ、わたし、この街に来てまだ三カ月だから、お屋敷のひとぐらいしか知り合いがいなくて……でも、突然倒れるだなんて、何があったのかしら……」

　休日ということで、街に出たのは覚えているけれど……倒れる直前のことは相変わらず思い出せないらしい。

「お屋敷？」

「ええ、そう。街外れにある大きな立派なお屋敷で……皆さん、とても良い方ばかりなのよ。なのに……いやだわ。わたし、何か発作を起こすような病気になってしまったのかしら。困るわ。本当にいいお勤め先なのに、そんなことになったら……」

　自分が突然倒れたことを、彼女は病に結びつけたようだ――普通の人間としてはごく当たり前の反応だが、そこで納得されては話が進まない。

　伽羅がそっとイーダルドの肩に触れ、「いいか？」と目で問いかけると、少年はや

はり目線だけで許可を出した。

「ナスキーアさん。初めまして、わたしは伽羅といいます。あなたが倒れられた時、すぐそばにいた者です」

ナスキーアの目に、小さな疑問――恐らく伽羅の性別についてだろう――と感嘆の色が浮かんだ。

黒髪黒瞳、象牙の肌をした伽羅は、とびきり美しい少女にも、とびきり美しい少年にも見えるのだ。

「まあ……ご迷惑をおかけしてしまったのですね。わたし、本当にその時のことを覚えていなくて……申し訳ありません」

明らかに年下の伽羅に対しても、恩人ということでか、彼女は丁重な言葉で礼を述べた。

「そのことですが……ナスキーアさん、本当に何も覚えていらっしゃらないのですか？」

念を押すような伽羅の問いに、彼女は訝しげに首を傾げた。

「あの……もしかして、わたしその時あなたに倒れかかって怪我をさせてしまったのでしょうか？　そういうことなら」

治療代を――と言い出した女性に、そうではないと伽羅は頭を振って答えた。

「違います。そうではなく……ナスキーアさん、これに見覚えはありませんか？」

そう言って、伽羅が差し出したのは、無色透明に変化した爆裂水晶だった。

邪気に支配されながら、握らされたこの石を、ナスキーアは必死に放すまいとした――これだけが自分を救ってくれるのだと、本能的に悟ったのかもしれない。

だから、そのあたりだけでも思い出してくれたら、話が聞きやすくなるのだが、と思って見せることにしたのだ。

だが、ナスキーアは不思議そうにそれを見つめるばかりだった。

「あのう、水晶のお守り石に見えるのですけど、これが何か――」

と、そこまで言いかけたところで、彼女の顔に別の訝りの色が浮かんだ。

何かが引っかかる――だが、それがなんなのかわからない。

そんな顔だった。

「すみません……これ、触らせてもらってもいいでしょうか？」
「どうぞ」
と答え、伽羅は水晶をナスキーアの手に握らせた。
その指が触れ、水晶が彼女の掌に落とされた瞬間――その瞳が大きく瞠られた。
そして、震える唇が掠れた声を洩らした……思い出した、と。
「……黒くて恐ろしいものが、突然わたしの中に入ってきて……」
呟きながら、彼女は甦る恐怖に耐えるように、ぎゅっと水晶を握りしめた。
「わたしが全部呑み込まれた……入ってきたどろどろした黒いモノが渦を巻いて暴れ出して、わたしの体なのにわたしは何もできなくなった……」
がくがくと震えだしたナスキーアの手に、気遣うように伽羅が触れると、まだ半分記憶のなかにたゆとっていた彼女の眼差しが向けられた。
「怖かった……わたしがわたしでないモノに支配されて、怖いことばかり叫びだして……怖くて、ただもう怖くて」
殺してやるとか、許せないとか、あんなに強く――わたしがこれまで考えたことも、

想像したこともなかったことを叫んで。
「あの黒いモノがどんどんわたしの中で大きく膨れあがっていって――このままじゃわたしが潰されてしまうと思った時に……」
誰かが、わたしの手に何かを握らせたんだわ。
感情が追いつかないのか、声は呆然としたものだった。
「それは冷たくて、でもとても温かくて力強いものだった。わたしを支配する黒いモノは、それを嫌って投げ捨てようとしたけれど……そのとき、わたしの手を包みこんで、『大丈夫だから』と言う声が聞こえたのよ」
大丈夫だから、と。
「あなたは助かる……絶対に大丈夫だから、強く信じてって……そう」
ナスキーアの瞳が、今度は真っ直ぐに伽羅を見つめた。
「……あれは、あなたの声だったのですね」
深い感謝に溢れた声で、彼女ははっきりとそう言った。

宿から知らせを受けたナスキーアの勤め先から迎えが来た時、イーダルドは悄然とした様子を隠しきれずにいた。

理由は簡単、イーダルドの予想と期待が大きく裏切られたせいだった。

倒れた際の記憶を取り戻したナスキーアは、伽羅が聖石の子供であることを知ると、絶対的な情報提供を約束してくれた。

魂までも押しつぶされそうになった自分を救ってくれた恩人だ。

わかることは全て答える——そう言ってくれた彼女は、実際、伽羅が放ったどんな質問にも辛抱強く応じてくれた。

この街での住所も勤め先も、疑問を抱く様子もなく教えてくれた。

住み込みで働いている彼女の住所と勤め先は同じ。

その屋敷の主人の名を聞いた瞬間、イーダルドの目は期待に輝いた。

それもそのはず——彼女はオズローン・ナージエの屋敷に三カ月前から勤めている

と言ったのだ！

そうと聞いてもイーダルドはすぐに、兄貴分であるサンネイドのことを彼女に尋ねようとはしなかった。

本音を言えば、一刻も早くそのことを問いただしたかった。

『半年ぐらい前に、十四、五歳の少年が弟子にしてほしいと訪ねて来たという話を聞いたことはない？』

『オズローンさまに、そうした年頃のお弟子さんはいない？』

『もしかしたら、断られても断られてもしつこく諦めずに弟子入りを希望してくるひとはいない？』

捜し続けたサンネイドの行方がわかるかもしれないのだ――気が急くのは当然だったが、イーダルドはじっと我慢した。

なぜなら、伽羅の話のほうがより重要だと感じたからだ。

先ほど目にした光景を思い出す。

悲鳴を上げて立ち尽くしたナスキーアの口から、恐ろしい言葉が溢れ出すさまは、

心臓が凍りつくような異様さに満ちていた。

（あれが邪気……）

もしもあの場に伽羅がいなければ、ナスキーアがあの後どうなったか想像もしたくない。

殺意そのもののような邪気に支配されたまま、もしかしたらナスキーアは誰かを殺しに行ったかもしれない。あるいは無作為に殺意を通行人たちに向けていたかもしれないのだ。

邪気に操られるまま、望みもせぬ殺人に手を染めたりしたら、ナスキーアの心は耐えられなかったに違いない。

肉体を勝手に操るだけでなく、人間の心を破壊しかねない危険なモノ——邪気とはあれほどに恐ろしいものなのだと知ってしまった今、伽羅より先にナスキーアから話を聞くことはできなかった。

それと同時に、イーダルドは伽羅やセイタマールに対して、深い尊敬の念を抱いた。あの恐ろしい状況下で、自らの危険も顧みず、ナスキーアを救うために動いた伽羅。

きっと彼女にとって、あの行動は当然のものなのだ。
強い力を持つ聖石の子供だから危険がないというわけではないはずだ。
そうでなければ、話を聞いたセイタマールが血相を変えて駆け出すはずがないのだから。
けれど、危険でも何でも、伽羅はいつだってあんな風に飛び出すのだろう——邪気からひとを救うために。そして、そんな伽羅の後ろで、セイタマールはいつだってその背中を守るのだ……それはどれほどの勇気と精神的強さを要する行為だろう。
（使徒さまが凄いのは、きっと不思議な力を持ってるからじゃないんだ。それを使いこなせるだけの心を持ってなくちゃ、使徒さまは務まらないんだ……）
そうでなければ、きっとあんなことはできない。
それを思うと、サンネイドが使徒になれないのはいいことのように感じる。
（ネイちゃんには悪いけど、ネイちゃんがあんな恐ろしいモノに関わらずにすんでよかった……あんな気持ち悪くて怖いモノ……）
本人の意志に関係なく、人間に罪を犯させるモノ——。

あんなものが存在するのだ。普通に生きている分にはきっと関わることのない、邪悪でおぞましい負の念の塊が。

誰が大切なひとを、そんなモノと近づけたいと思うだろう。

（ネイちゃん……会いたいよ。会ったら、おれ使徒さまの仕事がどんなに大変で危険かってこと、ネイちゃんが納得するまで何度だって繰り返して話すよ。ネイちゃんが使徒に選ばれなくて心底よかったって思うって、イヤな顔されてもいつまでだって繰り返すから）

だから、そろそろ見つかってほしい――。

そんなことを思いながら、イーダルドは伽羅とナスキーアの話が終わるのを待っていた。

そして、ようやくナスキーアにサンネイドのことを尋ねることができたのだ、が。

結果は――芳しくないどころか、まるきりの空振りだった。

オズローン・ナージエの屋敷には、サンネイドに似た背格好の少年は住んでおらず、また訪ねてきたこともないと言うのだ。

「もっとも、わたしが知っているのはここ三カ月のことだから、帰ったら皆に訊いてみるわ。だから、あまりがっかりしないで」

よほど酷い顔をしていたのだろう、酷い目にあったばかりのナスキーアに同情たっぷりの声で慰められた時には情けなくなってしまった。

（怖い思いした女の人に気を遣わせて、どうするんだ、おれ）

本当なら、自分こそが励ましてあげなければならないのに、不甲斐ないにもほどがある。

このことを知ったら、きっとメイファンは笑いながら愛の拳骨を見舞ってくれるに違いない——あの養母は優しげな容姿に反して、実は結構辛辣なのだ。

「うん。何かわかったら教えてくれると嬉しい。ちいちゃんたち、あと数日はこの街にいるようだし……それに、お姉ちゃんのことも心配だし」

いつどこでかはわからないが、ナスキーアは確かに邪気に関わる場所か物に触れたのだ。

知らずにまた触れてしまったら、同じことが起こらないとも限らない。

イーダルドの言葉に、女性は少しだけ顔を強ばらせながら、そっと懐を押さえた。
「大丈夫よ。伽羅さまに、新しいお守り石もいただいたもの。新しい石のヒビが消えたり減ったりしたら、ちゃんと知らせるようにとも言われたし……。でも、心配してくれてありがとう。わたしには弟はいないけれど、イーダルドのように優しい弟なら是非欲しかったわ」
にこりと笑う彼女は、伽羅のような美貌の主ではなかったが、太陽を思わせる明るい魅力に溢れていた。
「おれも、お姉ちゃんが姉ちゃんならきっと嬉しかったな。あ、見た目通りならの話だけど」
「あら、それはどういう意味かしら？」
訝しげに首を傾げるナスキーアに、イーダルドはこっそり耳打ちした。
「おれのお母さん、見た目はすっごく優しそうなのに、怒ったらもう怖くて怖くて……だから、お姉ちゃんがそうでなかったらいいなって話」
その言葉に、彼女がくすくす笑い出した。

「お母さんが怒るのは、子供が悪いことをしたか、危ないことをした時よ。その様子だと、イーダルドはずいぶんやんちゃのようね、あまりお母さんに心配をかけないようにね」

笑みを孕んだ声が告げた内容は――あまりに的を射たもので、イーダルドは思わず「やぶへびだ」と首を竦めてしまった。

その日、オズローン・ナージエの屋敷を、ひとりの若い女性が訪れた。

かつて彼のもとで連音を学んでいた、ほとんど唯一の弟子ともいえる人物だった。

亜麻色の髪と榛の瞳を持つその女性――フィランタ・オーディオルは、突然の訪問を師である男に謝罪した。

「申し訳ありません。突然に」

頭を下げたフィランタに、オズローンは笑いながら手を振った。

「いいよ、何かあったらいつでも来るように言ったのはわたしだからね。今回は何を見つけてきたんだい？」

熱心な弟子だったフィランタは、連音のためになりそうな物を見つけると、師である彼のもとへ持ち込むのだ。

自分で試してよいと思ったものでも、師の言葉がないと安心できないのだと言った彼女に、「独り立ちするひとが、そんなことではいけないよ」と窘めつつも、同じく連音に貪欲に取り組んでいる彼は快く応じたものだ。

「まあ、独立しても連音に取り組む同志だからね」

と。

だが、今回は何かを「見つけた」わけではないようだった。

フィランタは持っていた包みを解くと、中から一本の音叉を取りだしたのだ。

「金属の光沢が少し違うね。合金の割合を変えたのかい？　それとも金属を？」

「両方です。連音の音叉は基本的に水晶の波動に合わせてありますけど、他の石も使うときはその石に合わせた音叉がいいのではないかと思いまして」

因みにこれは翡翠の波動に合わせたものです――。
「ほお」
オズローンは身を乗り出すと、興味深げに音叉を手に取った。
「鳴らしても？」
「それをお願いしたくて今日お伺いしたのです」
頷きながら、フィランタは荷物から親指の先ほどの翡翠を取り出し、差し出そうとした。
しかし、これにはオズローンが頭を振った。
「どうせなら、最高の翡翠で試したほうがいいだろう？」
そう告げると、彼は部屋の隅にある大棚に歩み寄り、引き出しから一粒の石を取りだした。
若竹色の鮮やかな緑の石は、翡翠の中でも最上級とされるものだ。
フィランタが苦笑する。
「また増えたようですね……師の収入のほとんどは、石の代金で消えているのでは

ありませんか？　確かに混ざり物の少ない上質な石ほど良い音を出すことは承知してますが……」

弟子の言葉に、「当然だろう」とオズローンが頷く。

「目指すなら最高のものを、だ。君の翡翠も悪くはないが、できればもっと小粒でも質の高いものを選んだほうがいい」

言いながら、オズローンが音叉と翡翠を軽く触れ合わせた――と、同時に。

りいいいいーん。

澄み切った音が室内に響き渡った。

うっとりと聴き惚れるようなその音色に、しかしフィランタの双眸に翳りが走った。

そのことに気づいたオズローンが声をかける。

「どうしたんだい？」

師の問いかけに、彼女は小さく頭を振った。

「いえ、この翡翠で試した時は充分に翡翠の響きを引き出せたと思ったのですが、師の翡翠との音色を聴けば、全然引き出せてはいないな、と……まだまだ研究が必要の

ようです」

彼女の言葉に、オズローンは下手な慰めを口にしたりはしなかった。

「そのようだね」

残酷なまでの率直さでそう答えると、彼は再度大棚に近づいた。

戻ってきた時、十粒ほどの貴石が彼の手には握られていた。

「最高の物を目指すには、最高の物を使わなくてはならないよ、フィランタ。君の志を認めるからこそ言おう。研究にはこれらの石を使いなさい。どうせ演奏用に使えと言っても、君が受け取らないことは知っているが、わたしが認める研究の成果を出したいなら、これは断れないはずだよ」

「オズローンさま……」

何かを噛みしめるように、フィランタが師の名を呼んだ。

「いいね？」

そう念を押され、彼女はゆっくりと頷いた。

「では……研究のため、一時お借りします」

そうしてオズローンの屋敷を辞したフィランタは、門の外を出た途端、堪えきれぬように顔を歪ませた。

（師よ……師よ。いつからですか？　いつから貴方の音は――）

以前と違うものになってしまったのですか。

声にならぬ問いかけは、ただフィランタの喉の奥に消えた。

4

「妥協する」

その日の夕食の席で、珍しく同席したセイタマールが苦虫を噛み潰したような渋面でそう言い出した時、伽羅は何を言われたのかわからなかった。

イーダルドは尚更何のことかわからなかったのだろう、きょとんとした顔をしていた。

「セイ？」

どういう意味ですか？

眼差しで問いかけると、最近では滅多に口もきいてくれなくなった相棒の青年は、ますます渋い顔になった。

「人間の体の自由を奪うほどの邪気が存在し、それに殺された聖石の子供が関わっているというのなら、簡単な調査だけして地元の神殿に放り出すわけにはいかないと言ってるんだ。どうせおれがそのつもりでも、お前は言うことを聞かないだろうしな」

ふう、と深いため息まじりの呟きは、完全に伽羅の性格と言動を見抜いたもので、黒珊瑚の子供は思わずう、と声を詰まらせた。

確かにその通りだった。

セイタマールが神官長オサラディーンから命じられた依頼を適当に切り上げてでも、伽羅を那八に連れ帰りたいと思っているのは知っていたし、その奥にあるのが大陸最大の勢力を誇る地神神殿である芭蕉の様々な思惑から守るためであることも。

わかりすぎるほどにわかっていたからこそ、伽羅はこれまでセイタマールに正面切って自分の望みを口にできなかったのだ。

心配してくれているのは重々わかっている。

理解しているし、ありがたいとも思っている。

だが——と続けることがどうしてもできなかったのは、彼が過去に負った心の傷の

原因に、自分があまりにも近づきすぎたからだった。

月瘴気に支配されそうになった、彼の最初の相棒である真珠の使徒の女性は、そうなるよりはいっそ、と彼の揮う浄化の刃の露と消えることを選んだのだ。

このまま月瘴気に浸食され続ければ、いずれ最愛の我が子を手にかけてしまう——だからその前に、と。

ラークラーニというひとは、月瘴気に繋がれてしまった自分の存在、自分の命ごと、セイタマールの血赤珊瑚を散りばめた、絶大なる浄化の力を秘めた刃の前に投げ出したのだ——事前に何の説明もせずに！

初めてその話を聞いたとき、伽羅はひどいと思った。

セイタマールにとって、それまで、浄化のための刃を揮うことは決して他者の命を奪うものではなかったのだ。

彼の聖剣は血赤珊瑚の……赤い炎と流れる水の力で、歪みやねじれを解きほぐし、正しい姿に戻すためのものだった。

そう、彼は信じていた。

なのに、彼は初めて得た相棒を相手に、自らの聖剣の別の力を揮い、全てが終わったあとにその意味を知らされたのだ。

結果、彼の心には大きすぎる傷が残り、それは今も癒えていない。

それを知っていて、その傷口を広げるようなことは言えなかった。

だが、その一方で自分を壊れ物のように扱わないでほしいと思っていた。

自分は彼の最初の相棒ではない。彼女のようにならないと、未来を見通せない以上言いきることはできないが、それでもそうならないよう最大限の努力は惜しまないつもりでいる。

だから、もっと信じてほしい、と。

望みを口にできぬまま、時間ばかりが過ぎていくのかと、焦りとも不安ともつかぬ思いが胸の奥に積もっていくのを、どうすることもできずにいた。

それでも、この街でナスキーアを支配する邪気の存在を知った瞬間、考えるより先に体が動いてしまった。

関係のない人間の肉体を支配してしまうほどに強烈な邪気を、放っておくわけには

いかないと本能が訴えたのだ。

だから、伽羅はこの件に関してだけは、絶対に解決するつもりだった——たとえセイタマールが反対しても、決してこれだけは見逃せない、と。

そのことをいかに彼に伝えようかと思っていた矢先に、セイタマールが「妥協する」と言い出したのだ。

驚くなと言うほうが無理だ。

いや、放っておいても自分が暴走するだけだと見抜かれているだけなのか——それぐらいならそばで見張っていたほうがましだと、そう彼は判断したのだろうか……。

（壊れ物扱いされるよりはいいけど、危険物扱いされていないか……？）

否定する根拠は、悲しいことに見あたらない。

伽羅は喜ばしいはずのセイタマールの言葉を素直に喜べない自分が切なくなった。

（けれど、これは大きな進歩だ）

伽羅は無理矢理意識を切り替えて、そう思った。

ずっとそばにいるのに無視されて、自分の意志に関係なく物のように扱われるぐら

いなら、不機嫌丸出しであっても、一緒に動いてもらえるほうがずっといい。

「セイ、ありがとう」

素直に礼を述べた彼女に、しかし相棒の態度は素っ気ない。

「礼を言われる筋合いはない。謝罪ならわかるが、どうせ態度を改めるつもりはないんだろうから、気休めにもならないな」

これまた見抜かれている——辛辣な言葉に、彼の機嫌の悪さが表れている。

とりつく島もないのはあまり変わらない。

（……これぐらいのことでへこたれてどうする。思えば二年前だって、最初はこれより酷かったじゃないか。あの頃に比べれば、まだましだ）

状況的には二年前のほうがよかったことは、この際棚に上げておく。

ついでに、自分ではどうしようもない女性化にまつわる問題も、しばらく忘れることにした。ぐだぐだ悩むのは時間の無駄だからだ。

「それで？」

不意に尋ねられて、伽羅はきょとんとした。

何を問われているのかわからなかったのだ。
「それで、とは？」
逆に問い返すと、セイタマールは「オズローン・ナージエのことだ」と切り出した。
「あの女性がオズローン・ナージエの屋敷に勤めている以上、彼の屋敷に邪気の源がある可能性は否定できないだろうが、彼が本当に瘴気や邪気を浄化できるほどの演奏をするというのなら話は変わってくる。だから訊いたんだ。オズローン・ナージエの演奏はどうだったんだ？」
聴いたのはお前ひとりだ、お前に訊くしかないだろう？
（そうだ、確かに）
ナスキーアが邪気にどこで触れたかを考えれば、その可能性を排除するわけにはいかない。
だが……。
伽羅はオズローン・ナージエの連音演奏を思い出した。
石と音叉が奏でる澄み切った清冽な音の数々は、恐ろしいまでに清かった。

空気を染め変えるばかりでなく、綺麗に洗うような音色は、客が持ち寄った雑多な念をほぐして安らかなものへと変えた。

あの音には確かに強い浄化の力が宿っていた。

「大きさや強さにもよるだろうけれど、確かに少々の邪気なら祓うことは可能な演奏だと思いました。彼が聖石の子供石を用いていることも影響してるんでしょうが」

伽羅の言葉に、セイタマールは「そうか」と頷いた。

「なら、可能性は低そうだな。もしかしたらあの女性は清浄すぎる屋敷に勤めている分、悪気への耐性が低くなっていたのかもしれないな」

清すぎる水で魚は生きられない——という言葉もある通り、清すぎる気に触れつづけることは人間にとって必ずしも良いことではない。

瘴気や邪気といかずとも、人間は日々小さな負気や悪気を生み出し、またそれらに触れるものだからだ。

だが、その程度で人間はおかしくなったりはしない。それらに支配を許さない程度の耐性を持っているものだからだ。

オズローン・ナージエが自宅で連音の腕を磨いているのだとすれば、屋敷内は尋常でなく清浄な空気で満たされているに違いなく、その中で暮らす人間は知らず音の清めを受け続けることになり……結果、負気や悪気への耐性が低くなることは充分考えられることだ。

「可能性は否定できないかな。だとしたら、彼女は街に出てから触れたことになるのか……？　だとしたら、それを特定するためにも、彼女が立ち寄った場所を一つずつ回ったほうがいいな」

幸い、ナスキーアの足取りは本人から覚えているだけは聞き出している。

久しぶりの休日ということで、けっこうたくさんの店を見て回ったらしいのだが、休みは一日だけだ、半日もあれば回れるだろう。

そんなことを思っていた伽羅は、次のセイタマールの台詞に目を瞠った。

「そちらはお前とイーダルドに任せる。おれは、念のために……」

「また別行動なのか!?　それじゃあ、これまでと全然変わらないじゃないか！」

セイタマールの態度が軟化したと思って喜んだのが馬鹿のようだ。

これにはイーダルドも加勢してくれた。

「そうだよ、兄ちゃん！　ふたりで協力して邪気の源を探し出さなきゃならないんだろう!?　なのに、別々に動いてどうするんだよ！　ちいちゃんが可哀相じゃないか！」

しかし、セイタマールは予想外の反応で、彼らに応戦したのである。

「あのな……若い女性だぞ？　若い女性が休みの日に出かける店だぞ？　詳しくは知らんが、甘味処や服や小物を扱う店が多いんじゃないのか？　そんな店に、おれにつきあえと？　悪目立ちするのが目に見えているのにか？」

盲点を突かれた格好になったふたりは、思わず「あ」と声を上げた。

想像してみる――若い女性が好む菓子店や洋品店に、精悍な顔立ちに目立つ色彩の若い男が入っていけば、それは確かに人目を引くに決まっている。

おまけに、あれこれ話を聞き出そうとすれば、絶対に多くの人間の記憶に残るに違いない……調査が目的だというのに、逆に詮索されかねない。

「だ、だけど……ほら！　ちいちゃんに可愛い女の子の格好をしてもらったら、一緒

にいても不自然じゃないんじゃないかなぁ……ちいちゃんが可愛いから、心配で目が放せないって風に振る舞えば、みんな納得するんじゃないかな」

ちいちゃんが目を離したら危なそうなのは確かなんだし。

イーダルドの援護は、なぜかちっとも嬉しくなかった。

セイタマールが短く答えた。

「却下だ。ただでさえ目立つ伽羅にそんな格好をさせてみろ、事件に関係なく厄介な有象無象が大挙して押し寄せてくるぞ。それこそ調査どころでなくなる」

遠慮も気遣いもないその言葉に、イーダルドが「なるほど」と得心顔で頷くのを見て、伽羅はますます嬉しくなくなった。

「それに、おれとしても調べておきたいことができたんだ。イーダルド、お前が神殿やオズローン・ナージエの演奏会を開催する興行主を訪ねて話を聞き出せるというのなら、代わってやってもいいぞ」

とんでもない無理難題に、少年が「無理無理」と手を振って辞退するのを見ながら、伽羅は思わず首を傾げた。

「セイ？　オズローン・ナージエのことを調べるつもりなんですか？」

邪気祓いの力が本物らしいと伽羅が確認した以上、気になる要素はないと思うのだが。

そんな思いが顔に出たのだろう、セイタマールがふう、と息をついた。

「お前の引き寄せ体質を考えると、一応調べておくに越したことはないと思ったんだ」

「引き寄せ体質って……」

「この二年、お前と組んでつくづく思ったのは、お前は無自覚に事件の中核に到る最短の道を見つけるってことだ。よくもまあ次から次へと手がかりを引き寄せるもんだと、感心を通り越して呆れたほどだ」

……これは褒められているのだろうか。

伽羅はどう反応していいものか迷った。

しかし、そんな彼女をよそに、セイタマールはこう続けた。

「そのお前があの女性を救った以上、彼女の関係者は要調査対象ということになる。

オズローン・ナージエが演奏に用いた子供石の出所や、これまでどこで演奏会を開いたのか、調べてみれば白か黒かはっきりするだろう。ついでに、イーダルドの疑念も晴れるだろうしな」

同じ施設で育った兄貴分の失踪に、オズローン・ナージエが関与しているのではないか――イーダルドの疑念はまだ完全に解けてはいないのだ。

「セイは、どう思ってるんですか？　彼の潔白を証明するために彼のことを調べるつもりなんですか？」

「個人的には関係ないと思っているが、お前の引き寄せ体質に引っかかった以上、先入観は捨てて調べるつもりだ。過去、まさかと思った相手が元凶だった時も、お前の体質はきっちり反応していたからな」

体質が反応――言葉がおかしいが、セイタマールは本気でそう思っているようだ。

危険物扱いの次は特異体質扱い――。

（仮にも二年も組んできた相手に……セイ、ちょっと酷すぎるんじゃ……）

そうは思ったが、伽羅は口には出さなかった。

出せなかったというほうが正しい。

もし反駁した結果、セイタマールが心外と顔に書いて、こんこんと自分の感想の根拠や過去の例を挙げ始めたとしたら……考えたくないが、その場合勝ち目はなさそうな気がしたのだ。

伽羅が黙りこんだままであることを、了承のしるしと取ったらしい赤毛の青年は、「そういうわけだから、彼女の足取りについては任せるぞ」と話を終わらせた。

そして伽羅はイーダルドと街に出かけることとなり——結果、ぐったりと疲れ果てることとなったのである……。

5

佳山の山頂近くに建てられた小さな小屋で修業の日々を送っているサンネイドは、その日、予定になかった師――フィランタの訪問に目を丸くしていた。

亜麻色の髪と榛の瞳を持つ若い女性は、彼の修業の成果と無事を確認するために、十日に一度この小屋を訪れるのだが、前回の訪問からまだ三日しか経っていない。

こんなことは初めてで、戸惑ったが、それ以上に彼を驚かせたのはフィランタの憔悴した様子だった。

若々しく美しい師は、彼女が奏でる音そのものの、明るい気を放っているのだが、今日は違う。

何かに絶望したような、悲しんでいるような、沈鬱な気を纏っている。

「先生？　どうなさったんですか⁉」

問いかけても、フィランタは曖昧に頭を振るばかりだ。

「先生……」

どうしたらいいのかわからず、立ち尽くしたサンネイドに、やがてフィランタは短い望みを口にした。

「サンネイド……聴かせて。あなたの音を」

いつものような、修業の成果を確かめるための求めではない。

ますます困惑する彼に、年若い師は「お願いだから」と言葉を重ねた。

その姿があまりに弱々しく、その声に助けを求めるような響きを感じ取った彼は、理由はわからないものの、彼女の求めに応じることにした。

そうしなければならないような気がしたのだ。

拙い音しか、まだ生み出せないでいる自分――その未熟さは、十日に一度訪ねてくれるフィランタが奏でてみせてくれる手本を聴く度思い知らされる。

どれほど想いを込めたところで、未熟な音は他者に何も伝えることはできない。確

固たる技術という土台なしには、想いも願いも託すことができないのだ。
フィランタのもとへ無理矢理押しかけて半年、本当に自分の出す音はまだまだで、どうして彼女がこんな顔をして自分の音を求めるのかわからない。
わからない――けれど。
（きっと）
と、サンネイドは思った。
自分にはわからなくても、彼女にはその理由があって、自分の音を欲しているのだ。
こんなに疲れた顔をして、悲しげな瞳をして……彼女の予定に外れた訪問は、きっと自分の音を聞く――それだけが目的なのだ、と。
（ならば、未熟でも何でも、奏でなくてはならない）
と思う。
使徒になれないという挫折感の闇の中に、連音という光を届けてくれたのは、他の誰でもない目の前の女性だった。
忘れていた、春の青空。

それを脳裏に甦らせてくれたひと——白谷の屋敷を調べ、押しかけた自分の姿に驚きながら、結局は弟子として受け入れてくれたひと。

（このひとが望むのなら、恥ずかしいなどと言ってられない）

音叉の握り方や石と触れ合わせる力加減など、本当に一から教えてもらったのだ。

下手どころか、まともな音も出せなかった頃を知っている相手に、そもそも見栄を張る必要などない。

（……まあ、できるなら、もっと上手になってからだったらよかったのに……とは思うけれど）

奏で終わると同時にため息をつかれるのは、自身の未熟を知ってはいても、あまり嬉しくはない反応だ。

その度に（次こそは）と心に誓うのだが、この半年で少しは進歩したのかどうか、自分ではよくわからない。

だから、自分の音などフィランタの耳には聴き難いまでに酷い代物なのでは——という不安は消えない。

（でも……）

最後に聴かせたのは三日前。

『まだまだね』

そう断じた音から劇的な変化が起こったとは、彼女も考えてはいないはずだ。

だったら、きっと――。

（技術以外の何かを、きっと先生は求めてるんだ……）

土台となる技術なしに、想いや願いを音に託すことはできないと、自分はそう思うけれど、もっと音に精通した人間は、未熟な音からも何かを拾い上げることができるのかもしれない。

そして、彼女がそれをこそ、今求めているのだとすれば――。

サンネイドがやるべきことは、この半年で確実に習得できた技術の範囲で……背伸びすることなく、音に想いを託して奏でることだけだ。

（……多分、聴いたあとに「まだまだね」とやられるんだろうけど……）

それを承知で聴きたいと言ったのは先生でしょうと、今回は反論できるからいいか。

そんなことを思いながら、サンネイドは音叉と石を置いてある台に近づいた。

精神的に疲れている様子のフィランタのために、一番心地よい音は何だろう――水晶の水のような優しさ、砂金水晶の森の緑に包まれるような優しさ、紅水晶の全身を優しく包みこんでくれるような優しさ。

癒しの力を持つ石は多いが、それぞれに印象がちがうことを体感したのは、連音を学び始めてからのことだ。

聖石の子供として、石の力については学んでいたはずだが、それらは言うなれば純然たる知識として記憶に刻まれているだけの情報であり、肌で感じ、理解する域に達するものではなかったのだ。

（使徒になれなかった理由は、もしかしたらそのせいだったかもしれない）

石に対する深い知識と理解――それは頭で覚えるようなものではなかったのかもしれない。

感性――肌でそれを感じ取る――それこそが必要だったのかもしれない。

今にしてはそう思う――思える。

だからといって、もう一度使徒を目指そうとはサンネイドはもう思わないけれど。
自分の狭く閉ざされた世界を広げてくれたのは、石と音叉が奏でるフィランタの生み出した音であり……そこに感銘を受けたからこそ、今の自分があるのだから。
だから、その恩人の音に報いるための音を、今はただ考えて捜すだけだ。
（先生……疲れた顔をしてる。とても悲しそうな目をして……今の先生に必要な音色は何だろう？　元気づけ、励ますような明るい音？　違う。疲れ切った時に、「頑張って」と言われても頑張る気になんてなれない）
それは、身を以て知っている。
（ただ、疲れを癒す音……でも、それだけじゃ、足りない。だって、先生は傷ついた目をしてる……）
優しく包みこみ、尚且つ痛みを癒す音――。
必要なのは、それだ。
（なら）
懸命に考えて、サンネイドは結局ふたつの石を選んだ。

音叉はひとつ――。

そうして、彼は第一の音を生み出した。

それは砂金水晶と音叉が触れ合うことで生まれる響き。

リ、リィィィィン。

次に手にしたのは紅水晶。

軽く音叉に触れあわせると、包みこむ優しさの響きが空間を震わせた。

（大丈夫です、きっと、大丈夫……だから、そんなにあなたが傷つく必要はないんです）

サンネイドのそんな思いを伝えるために選んだ二石は、彼の思いを伝えるべく音叉と共鳴してくれた。

（あと、伝えたいのは……）

やはり、自分が視たあの春の青空だろうか。

夏の青空は心が弱った者の目には強すぎる。

秋の青空は心が弱った者に悲しみをもたらす。

冬の青空は稀有だけれど、厳しい寒さを凌駕するには到らない。
だから、今のフィランタに視せたいのは、やはり春の青空だろう。
彼女が自分に視せてくれた――天河石の奏でる音によって……。
（あれを、できるなら先生にも――）
そう思ったのが敗因だったのかもしれない。
それまで、静謐な山の空気に溶け込むように生み出された二つの音とは明らかに違う、場違いと言うか素っ頓狂というか、まるっきりそれまでの流れから外れた音が佳山に響き渡った。
しまったと思ってももう遅い。
手遅れだ。
現に、まるでそれが合図であったかのように、途中まで心地よさげにサンネイドの奏でる音に耳を傾けていたフィランタが、堪えきれぬ様子で噴き出したのだから。
「先生！　聴かせろと言ったのは先生じゃないですか！　なのに、笑うだなんて！」
憤慨して叫んだサンネイドに、フィランタは笑いながら「違うの、違うの」と繰り

返した。

だが、何がどう違うのか、説明してもらわないことにはサンネイドにはわからない。わかるのは、未熟な連音奏を求められた挙句、途中で笑われたという結果だけだ。

「ごめんなさい。でも、気負いすぎだわ、サンネイド！」

告げてフィランタは尚も笑い続けた。

馬鹿にされているわけではない——それは何となく感じるのだけれど、やはり笑われっぱなしというのは面白くない。

「……先生」

恨みがましい気持ちを抑えるのは難しかった。

仏頂面になった彼の顔を見て、フィランタがさらに可笑しそうに笑い出した時、彼はこれまでの半年間の修業を少しだけ後悔した。

頑張って、頑張って、頑張ってきた自分に対する師のこの仕打ち！

（酷くないか？　これって、酷くないか!?）

そう思った時のことだ。

フィランタが不意に真顔になって、告げてきた。
「山を下りましょう、サンネイド。充分とは言えないけれど、貴方は自分の音を奏でるだけの力をすでに手にしている」
大切なものは技術でも道具でもない。
「あなたが、そのことを証明してくれた」
だから、山を下りましょう。
フィランタの言葉に、サンネイドは混乱した。
彼女は自分をこの小屋に連れて来た時に、連音には二つの土台が存在すると言ったのだ。
ひとつは伝えたいという思い、もう一つは伝えるための技術。
『あなたの伝えたいという思いは充分すぎるほどに育っているわ。あなたに足りないのは伝えるための技術よ。単つの音を奏でることさえできずにいるあなたが、連音を習得できるわけがない……だから、サンネイド、まずは単つの音と向き合いなさい』
音叉と石が生み出す一つ一つの音と――。

言われた通り、向き合ってきたとは思う。
音叉を通じて、似たような効用を持つ石としか思っていなかった様々な石の持つ豊かさに触れた。
『まだまだね』
半年間、ずっと繰り返され続けた言葉――。
それが、今、この時――。
初めて、与えられた……認められた証。
「いいんですか？」
震える声で、サンネイドは問い返さずにはいられなかった。
「こんな音しか、まだ生み出せないおれでも……？」
「ええ。あなたの音を聴かせたい人がいるの。あなたの素直で優しい音を」
フィランタの声は、真摯な響きに満ちていた。
嘘ではない――彼女は本当にそれを望んでいるのだ。
そう信じられたから、サンネイドはゆっくりと頷いた。

「わかりました」
と――。
恐らくはそのために、彼女は自分を育ててくれたのだと、心のどこかで悟っていた。

気が進まない状況であろうと、必要なことだと思えばいくらでも意識を切り替えられるのは、セイタマールの長所である。
彼は朱匂の地神神殿を再訪すると、オズローン・ナージエが演奏に使用したという聖石の子供石の購入記録を洗い出した。
聖石の子供石は守り石として絶大な人気を誇るだけに、神殿側はその管理に細心の注意を払っている。どれほど小さな石であろうと、購入者の記録が残されるのだ。
これは世間に出回っている偽物や正規外品を取り締まる上で小さくはない効果を上げている。もっとも、それでも転売品や不正に流出した品がなくなるわけではないの

だが。

そういう事情があるため、オズローン・ナージエの購入履歴を辿るのは容易かった。演奏に用いるには、多少の大きさが求められるためか、高額購入者の記載帳には彼の名前が日付ごとにいくつも記されていた。

（演奏に用いられていたのは、確か水晶、紅水晶、縞瑪瑙に玉随……）

伽羅が気づいた子供石の数は十を超えていた。

聖石でない普通の石も演奏には使われていたという話なのに、よくそれだけ気づくものだと感心することしきりなのだが、本人にはその感想は伝えていない。

「あと翡翠と黄玉も買っているのか」

貴石としても価値の高い翡翠や黄玉は、生み出す者が稀少なため、子供石のなかでも特に高価なものとされており、その大粒の品となれば、相当な資産家でもなければ手が出ない価格となる。

オズローン・ナージエが、相当売れている演奏家であることは確かだが、それにしてもその収入の大部分は子供石につぎ込んでいると見ていいだろう。

（演奏家は楽器に金を惜しまないというが、それと同じかな）

音にこだわる者の気持ちはわからないが、オズローンが連音に心血を注いでいるらしいことはこの履歴から明らかだった。

（全て神殿から買ってるんだな。神殿にとっても彼は大得意先ということか）

神官たちがある意味商売敵ともいえるオズローンに対して好意的なのは、そのせいかもしれなかった。

（まあ、使徒の数は限られているから、新たな浄化法を編み出してくれるなら有り難いぐらいだがな）

だからこそ、オサラディーンも彼の演奏に関心を抱き、演奏会のチケットを用意したのだろう――伽羅の報告を受ければ、神殿も連音による浄化の研究に乗り出すかもしれない。

その場合、オズローン・ナージエは貴重な協力者となってくれることだろう。

（伽羅が気づいた石は全部ここに記載してあるな）

怪しいことは何もない。

やはり、今回の件に関してオズローン・ナージエは無関係なのか、と思った時のことだ。セイタマールはふと気づくことがあって、彼の購入履歴を洗い直した。

そして、ひとつのことに気づく。

（さして高価な石でもないのに、購入していない……演奏には普通の石を使っていたというが……効果の高さを狙うなら、子供石を使いたがるものではないのか……？それとも、この神殿にある子供石の質に満足できなかったのか……？）

気にすることはないかもしれない。

だが、調べる以上は完璧を期すべきだ。特に自分たち使徒にとって、勘というものは侮っていいものではない。気にかかった以上、無視すべきではないだろう。

セイタマールはその後、オズローン・ナージエの演奏会を取り仕切る興行主のもとを訪れ、彼のここ数年の活動状況を聞き出した。

国内外を問わず、精力的に活動しているかと思いきや、ここ一、二年、彼の活動はごく限られたものだった。

有名なわりに演奏会の頻度が低いことを疑問に思い尋ねると、興行主である男は残

念そうにこう答えた。

「数年前までは、あちこちで演奏会を開いていたんですがね、この一、二年、音へのこだわりが高じたらしく、満足のいく演奏をするために、数を減らすと言い出したんですよ」

と。

その結果、演奏会は半年に一度ということで落ち着いたのだと言う。

そして、この一年、彼は国外で演奏会を開いたことはないのだと。

（やはり、サンネイドの失踪に彼は無関係か……）

もともとその可能性は低いと思っていたが、はっきりしたことで、セイタマールは自分が思った以上に落胆していることに気づき、苦笑した。

どうやらいつの間にかイーダルドに入れ込んでしまったらしい。

彼のためにも、サンネイド失踪の足取りを調べてやりたいと思っていたようだ。

このことを知れば、イーダルドはきっとがっかりするだろう。

それを思うと心が重くなったが、事実は事実だ。

（ある意味、自主的な失踪ならどこかで元気にやっていると思えることが救いかな）

事件に巻き込まれたのでないのなら、サンネイドの命が危険に晒される可能性は低い。

だが、そんな気休めを、あの少年が受け入れるかどうか……。

説得には骨が折れるかもしれない。

そんなことを考えながら、セイタマールは念のため、数年分の演奏会の記録を見せてもらうことにした。

確かに興行主の男が残念がるのもわかるほど、以前の彼は幅広く活動していたようだ。

それこそ、国内外を問わず、二、三カ月に一度の頻度で演奏会を開いていた。

（あまり大きな都市ではないが、ほとんど大陸中の国を網羅してないか？）

大都市ならすぐに位置が頭に浮かぶのだが、地図に当たらないとわからない地名がいくつもあり、セイタマールはそのことを逆に不思議に思った。

「大きな街での演奏会が少ないようだが……何か理由が？」

それに対する男の答えは、簡潔なものだった。

「当時は曲にもならない音の連なりで客が呼べるわけがないと、大きな街の劇場には相手にしてもらえなかったんですよ。評判が広まった途端、掌を返したところも少なくはありませんが、彼もわたしも、当時の彼らの対応を覚えてますからね、乗ろうとは思わないんですよ」

筋の通った話だ。

疑う余地はどこにもない。

だが――。

（何だ？　何が引っかかっている？）

伽羅のこだわりに、いつの間にか自分も引きずられていたのだろうか。

彼女の本能的な直感はなるほど素晴らしいものがあるが、百発百中というわけではない。彼女とて、先入観に惑わされることはあるのだ。

だから、疑わしき点がないとはっきりした以上、オズローン・ナージエに対する疑念はきっぱりと捨て去るべきだ。そうでなければ真実には行き当たらない。

そう思うのに、セイタマールの中でオズローン・ナージエの名前は消えようとしないのだ。

（仕方ない。伽羅たちにもきっぱり諦めさせるために、念には念を入れておくか）

何より自分を納得させるためにも、多少の時間をかけることに迷いはない。

数年分の演奏会の開催地を頭に入れ、セイタマールは街の図書館に向かった。

そこで疑念は晴れるのだと、その時彼は信じていた――。

6

オズローンは自宅の地下室で至高の音に酔いしれていた。
そこは屋敷の誰も知らない、彼だけの楽園だ。
練習室では奏でられない特別な音のためだけに存在する小部屋で、彼は通常使うものとは違う音叉を手にしていた。
演奏に用いる音叉が金属でできているのに対し、今彼が持っているのは白い――磁器製のものだ。
高温で焼きしめられた磁器は、金属とはまた趣の違う澄んだ音を奏でる。
確かに金属に比べて硬度は低いが、この音を知った今、彼は金属製の音叉に魅力を感じることはない。

この部屋の中だけで奏でられる至高の音――誰かに聴かせられないのが残念だなどと、彼は思ったこともない。

いや――。

「フィランタ……君には、君になら、聴かせてあげてもいいんだけどね」

数日前に訪ねてきた弟子の女性を思いながら、オズローンはくすくすと笑った。

連音に取り憑かれた同志とも呼べる女性――彼女もまた至高の音に辿り着くための努力は惜しまない人間だ。

「君もきっと、この音を聴けばただの音叉や石の生み出すものが、屑同然のものだとわかることだろうね」

そうすれば、金属の音叉にこだわる愚かさに気づくだろう。

「至高の音は、選ばれた者だけが耳にすることを許されるものだ。この澄み切った音の美しさときたら……」

かつん、と音叉と石を軽く触れ合わせるだけで、室内に広がる音の波――。

リィィィン……ィィィン……ィィ……ィン。

かつて神殿で耳にしたものと同じ――いや、それ以上に美しい音が空間を支配する。
今度は別の音叉に持ち替えて、オズローンは音を奏でる。
リィィン。
澄んだ音がもうひとつ生まれた。
だが、オズローンは不機嫌に眉宇を顰めた。
「最初はこれでも美しいと思っていたが……音の澄み方が足りないな。やはり、材料の善し悪しにもこだわるべきか」
ふむ、と頷くと、彼はその音叉を床に叩きつけた。
悲鳴にも似た甲高い音を立てて、不出来と断じられた音叉が砕け散る。
「どこかに、もっといい材料はないものかな。そうたとえば……」
その先は声には出さず、オズローンはぺろりと唇を舐めた。
その双眸に浮かぶのは、邪気を祓えるほどの演奏をする人間には不釣り合いな、貪欲に何かを求める強い光だった。
と、その時だ。

背後の隠し扉のあたりから、がたりと人のよろめくような音が聞こえたのは。
オズローンは慌てる風もなく、ゆっくりと振り返った。
「やれやれ、わたしとしたことが、扉をしっかり閉めなかったとは……少々油断したかな」
異様なまでに穏やかな声に、扉の向こうで息を呑む気配がした。
悠然たる足取りで、オズローンは扉に近づいた。
「しかし、君もいけないよ、ナスキーア。入って間もないとはいえ、わたしの部屋に勝手に入り込むだなんて」
話しかけながら、彼は扉に手をかけた。
そこに、彼の想像した通りの人物が立ち尽くしていた。
ナスキーア・フォルス——三カ月前に雇い入れた住み込みの料理人だ。
珍しい守り石を持っているのに気づいて、先ほど部屋に呼んだのだ。
街で邪気に触れたところを聖石の子供に助けられ、その際にもらったという守り石は珍しい爆裂水晶だった。

負気や悪気を吸収するその石は、非常に珍しく貴重なものではあったが、オズローンの興味を引くものではなかった。

無数の亀裂の入った水晶では、連音演奏には使えないからだ。

それより彼が関心を抱いたのは、彼女にその石をくれたという聖石の子供だった。

貴重な守り石を出会ったばかりのナスキーアに与えたというその子供は、全身が輝くように美しかったのだと言う。

オズローンは人間の容姿には興味がない。だが、彼は神殿とも近しくつきあうが故に、聖石の使徒の多くが容姿に優れている事実を知っていた。

その子供は使徒ではないらしい。だが、使徒に選ばれてもおかしくないだけの力を持っていることは間違いない。

聖石の子供なら、誰にでも邪気に触れた人間を救えるというわけではないのだから。

力に溢れた聖石の子供――ナスキーアを通じて、その子供に会えないだろうかと、先ほど考えたばかりだ。

だが――。

「伽羅という君の救い主に会わせてほしいと頼もうと思っていたのだが……その様子では無理そうだね」

がたがたと震えて立ち尽くすナスキーアの目は、オズローンではなく、小部屋の奥に置かれた棚に釘づけになっていた。

整然と並べられた――人数にして、十人は下るまいという人骨に！

「怯えることはないよ。心配しなくても、君をあの中に加えてあげるつもりはないのだからね。あそこに並んでいるのは、選ばれた特別な子供たちなのだから――」

君を救った綺麗な子供と同じ、ね。

くすくす笑いながらそう告げると、恐怖のあまりか、ナスキーアの膝ががくりと崩れた。

自室に続く狭い階段に崩れ落ちた女性を、オズローンは関心のない様子で見下ろしたあと、楽しそうに手を打った。

「やっぱり、君にその子を紹介してもらおう。勝手に主人の部屋に入るような行儀悪い女性など雇ってはいられないが、最後に少しぐらい役に立ってもらえれば、わたし

の心象も良くなるというものだ」

そうしよう。

我ながら良い考えだ――それぐらいのことをしてくれたら、音叉の材料にするわけでもないのに、面倒な手間をかけさせられても怒りは覚えないだろう。

何しろ――。

「話に聞く限りにおいて、その子は最高の材料になってくれそうだもの」

嬉しそうに呟くオズローンの目に、罪悪感の色はかけらもなかった。

至高の音を追い求めるあまり、彼は自分が人間としての道を踏み外したことさえ気づいてはいなかった――。

ナスキーアの昨日の足取りを辿ることで、邪気の源を捜すという行為は、とてつもない疲労感を伽羅に強いることになった。

「つ、疲れた……」

宿に戻るなり、寝台に仰向けに倒れこみながら洩らした一言に、同行した少年――イーダルドが「ご愁傷様」と慰めの声をかけた。

本当に、疲れた。

それというのも、訪ねた店のほとんどが、セイタマールが指摘した通り、若い女性を相手にした服飾や小物を扱う店だったせいだ。

まさか、邪気の源を捜してますと正直に話すわけにはいかず、また悪い虫が寄ってくるのを防ぐために、男女どちらともいえない格好で出掛けた伽羅は、ふわふわした可愛らしい服や小物で溢れた店では非常に浮いて見える。

そこで話を円滑に進めるために、イーダルドが提案したのが、「姉の誕生日の贈り物を探している」という言い訳だった。

それなら少年ふたりが女性向けの店に入ってもおかしくはなかったし、慣れない店内の様子に多少ぎくしゃくしたところで却って自然に映るものだからだ。

その提案は伽羅にとっても良案に思えた。

だから、その設定でそれぞれの店を巡ることにしたのだが……行く先々で誤算が生じた。

その原因は、ひとえに伽羅の容姿である。

人目を引く滅多に見ない美少年――実は美少女なのだが――に、店員の女性も客たちさえ、興味津々で声をかけてきたのだ。

いや、それはそれで情報収集には都合が良かったので、伽羅もイーダルドも――特にイーダルドが――愛想良く相手をした。神殿育ちで他人との距離のはかり方がいまひとつわからずにいる伽羅は、専ら聞き役に徹して、せっせと情報をかき集めていたのだ……が。

客のひとりが、近くの棚にあった薄紅の花を象った髪飾りを伽羅の髪にさしこんだことから、疲労蓄積は始まった。

似合う、いやこちらのほうが――いやいや、それならこの揃いの帽子も。

等々と、いつの間にか店員と客が一団となって、伽羅を飾り始めたのである。

それは、伽羅には覚えのある感覚だった。

女性になってすぐ、シイレートルの手配で預けられた紅晶楼――そこの住人である姐さんたちに、毎日着せ替え人形よろしく飾り立てられていた時の姐さんたちの態度とそっくりだ。

その時、ちらりとイヤな予感はしたのだ。

だが、さすがにこんなことはこの店一軒だけだろうと思い、必死に我慢した。

そして、どうやらこれ以上話を聞いても収穫はないと見切りをつけて店をあとにした時は、正直安堵したものだ。

ああ、助かった――心底からそう思ったのだ。

なのに、どういうわけか、次の店でもそのまた次の店でも！

顔ぶれは違うというのに、店員と客が一緒になって、伽羅を飾りたてようとするのだ！

結果、邪気の源らしき場所は発見できぬまま、疲労困憊という悲しく切ない現在の状態に陥ったわけである。

「……街中にあんな物騒な邪気の源がなかったことは喜ばしいが……どうして、あん

なに皆、わたしを飾ろうとするんだ……」

ぐったり力を抜いたまま、寝台の上で呻くように洩らすと、イーダルドが「決まってるじゃない」と返してきた。

「ちいちゃん綺麗で可愛いから、飾ってもっと可愛く綺麗にしたいって思うんだよ」

「可愛い？」

自分が？

「あり得ないだろう。わたしは昔から可愛くない子供だと言われ続けてきたんだ。自分が可愛くないことはさすがにわかってる」

子供の頃から大人びた彼女の態度は、周囲の大人たちの目からみれば、子供らしくない、かわいげのない子供だった。

そうした意味での「可愛くない子供」発言だったのだろうが、伽羅は額面通りの意味として受け取っていた。

イーダルドもそのことに気づいたのだろう。一瞬何とも言い難い顔になり、「ちいちゃんって」と息をついた。

だが、続ける言葉が見つからない様子で、やれやれとばかりに頭を振った。

「ま、邪気の源がお姉ちゃんの出掛けた先じゃないのはわかったわけだから、収穫といえば収穫じゃない。こうなると、やっぱりオズローン・ナージエの屋敷が怪しいってことになるのかな？　でも、邪気払いできるような人の屋敷に邪気って溜まるものなの？」

素朴な疑問を口にする少年に、伽羅はゆっくりと体を起こしながら答えた。

「邪気の源になるものは、恨みや憎悪が染みこんだ物であることが多いんだ。だから、彼かその家人が、それを邪気の源と知らずに手に入れたという可能性はある。だが、あれほど浄化力に溢れた音に触れていれば、源の邪気も早々に尽きそうなんだが……」

昨日の邪気は、尽きるどころか生々しくさえあった。

それを思うと、伽羅はもうひとつの可能性を考えずにはいられないのだ。

「だけど、ちいちゃん。お姉ちゃんの行った店は今日全部回ったじゃないか。そこになかった以上、やっぱりあの屋敷が一番怪しいんじゃないの？」

「勿論、その可能性も否定はできないが、ナスキーアはもしかしたら邪気の源に直接触れたわけではないのかもしれない。表面化していない邪気に憑かれた人間に触れるか何かして、邪気がそちらから移動してきたということも考えられるんだ」

邪気は人間を選ばない——とはいえ、強固な守りを持つ憑きにくい人間より、守りの薄い憑きやすい人間を好むのは確かだ。

要は支配しやすい駒を得たいわけだから、敏感な人間は狙われやすい。

「ナスキーアさんは、見るからに敏感そうだったからな。精霊たちに好かれる一方で、そうした悪い気にも目をつけられやすいんだ。一応新しい守り石を渡しておいたから大丈夫だとは思うけど」

爆裂水晶の他に、黒水晶も渡しておくべきだったろうか——。

そんなことを考えていると、イーダルドが感心したように的外れな問いを投げてきた。

「ちいちゃんって、そういうの見ただけでわかるの？　じゃあ、仲間の聖石の子供たちでも、使徒になれそうなひととそうじゃないひととかもわかっちゃう、とか？」

さすがに苦笑するしかない。

「わたしは千里眼でも未来視でもないから、そうしたことはわからないよ。人間は変わるものだし、それと同時に運命も変わったりするわけだしね」

そう答えると、イーダルドは「へえ、けっこう良い感じにいい加減なんだね」となぜか嬉しそうに言った。

「良い感じにいい加減？」

不思議な言い回しに首を傾げると、少年は「だってそうじゃないか」と続けた。

「人間が変わるって、悪くなることもあるけど、逆の場合だってあるわけでしょ？それで運命も変わるって言うんなら、努力とかして良いほうに変わる甲斐があるっていうものだろ？」

下町で育ったイーダルドは、決して人間の良い面ばかりを見て育ってきたわけではないだろう――それでも歪まず、真っ直ぐに育ったのは、本人の資質と、周囲の影響だろう。

（きっと、お母さんとか兄貴分って言ってた子も、すごく前向きな強いひとなんだろ

うな）

そう思うと、ますますサンネイドのことを捜しだしてあげたくなった。

「……イーダルドは良い子だな」

思わずこぼれた言葉に、少年は照れたのか手をぱたぱた振った。

「ちいちゃん！　そういうことは、思ってても面と向かって言わない！　ちいちゃんって、いろいろずれてて面白いけど、そういうとこは円滑な人間関係コウチクのためにも直したほうがいいと思う！」

顔を真っ赤にしながら、微妙に失礼なことを言われた伽羅は、しかし彼の指摘通り少々ずれたところがあるため、素直に頷いた。

「そういうものなのかな？　確かにずれているともよく言われるから、イーダルドがそう言うなら気をつけよう。他にも気づくことがあったら、これからも教えてくれると嬉しい」

大真面目にそう言った彼女に、少年はまた「ちいちゃんって……」と呟いた。

だが、その理由を伽羅が尋ねることはなかった。

扉を叩く音が聞こえたのだ。

「あれ、兄ちゃんが帰ってきたのかな？」

そう言いながら、扉に向かおうとするイーダルドを止め、伽羅は寝台から立ち上がった。

「セイなら鍵を持っているから、ノックする必要はない。客人らしい……わたしが出よう」

危険な何かを扉の向こうから感じたわけではない。

だが、ぞわりと肌が粟立つような、奇妙な感覚は彼女にはなじみ深いものだった。

（何か、良くないことが起きているのか……？　それともこれから起こるのか？）

わかるのは、それが降りかかるのは自分と自分のそばにいる者に限られるということだ。

ならば――。

「どなたですか？」

扉越しに誰何すると、初めて聞く若い女性の声が返ってきた。

「すみません、昨日お世話になったナスキーアと同じ屋敷で働いてる者なんですが……」

その言葉に、伽羅の胸に不安が広がった。

すぐに扉を開けると、そこにはナスキーアよりひとつふたつ年長らしい女性が立っていた。

「ナスキーアさんに、また何かあったのですか？」

問いかけた伽羅に、その女性は「いえ、そういうわけでは」と前置きして、言伝を頼まれたのだと答えた。

「本当は彼女が来たかったみたいなんですけど、休むわけにはいかないので……よくわからないんですけど、いただいたお守り石のヒビが消えたとか……それで、相談に乗っていただけないかと」

その言葉を聞いた瞬間、伽羅は背筋に冷水を浴びせかけられたような衝撃を覚えた。

（亀裂が消えた……イーダルドの言ったとおり、邪気の源はやはりオズローン・ナージエの屋敷にあったのか……？）

あれほどの邪気を宿した品が、なぜ――。

浮かんでくる疑問を、伽羅は無理矢理押し込めた。今はそれより、ナスキーアの身が案じられる――爆裂水晶の亀裂が消えたということは、彼女は直接邪気の源に触れたのだ。力を失った水晶に、彼女を守ることはかなわない。

「これから伺っても大丈夫ですか？　もし良いようなら、すぐにでもナスキーアさんと話したいのですが」

これに対する、ナスキーアの同僚という女性の返答は「願ってもないことです」だった。

「ちいちゃん、出掛けるの？　なら、おれも――」

ついていく――と続けようとしたイーダルドを、伽羅は駄目だと断った。

「ふたりとも出掛けてしまったら、セイが戻ってきた時、わたしたちの居場所がわからず心配する。彼は一見無愛想だが、本当は情の深い、優しいひとなんだ。街から戻っているはずのわたしたちがいなかったら、絶対心配するに決まってるんだ。それに、イーダルドには今日のこととか報告もしてほしい」

「でも……」

そういうことは、書き置きしておけば……と言いかける少年の瞳を見つめて、伽羅は「頼む」と告げた。

漆黒の双眸に浮かぶ真剣な思いを汲み取ってくれたのか、少年は渋々と頷いた。

その言葉に、気づかれぬよう息を洩らし、彼女は伝言を持ってきた女性に向き直った。

「少しだけ待っていただけますか？　新しい守り石を用意しますから」

女性はすぐに頷いた。

その瞳に嘘偽りない安堵の色を見いだし、伽羅は思った――このひとは、違う、と。

（このひとは、あの邪気の源とは関係ない。本当に、ナスキーアさんのことを案じて、わたしが一緒に行くことを喜んでいる……）

では、邪気の源の品の持ち主は誰なのか。

是が非でも、それを知らなければならない。源の品がいかなる経緯でオズローン・ナージエの屋敷に持ち込まれたのか、そこに屋敷の主であるオズローンが関わってい

るのかどうか。

あの聖石の子供――伽羅の同胞の魂を怨嗟と憎悪の渦に堕とした、許し難い真の敵の姿を暴き出すためにも。

危険が待つのは承知している。

それでも、この一歩を踏み出さない限り、真実に辿り着くことはできないと感じる以上、踏み出すしかない。

（何だか久しぶりだ、この感じ……ああ、そうだ。この二年、いつもセイが傍にいたから、こんな頼りない気分を味わうことはなかったんだ）

いつだって、隣に、あるいは背後に、あの血赤珊瑚の使徒である青年はいてくれた。伽羅がどんな無茶をしても、彼が必ずそばにいてくれた。

だから伽羅は安心して感じるままに、信じるままに、真っ直ぐに突っ走ることができたのだ……彼という存在がそばに在る。その事実こそが伽羅にとって最強の護りだった。

そう、それは現実的な彼の力だけではなく、一見わかりにくい彼の優しさや思いや

り、そうしたもの全てを含めた意味でのことだ。
（だから、大丈夫だ、わたしは）
これからどれほどの邪気に触れることになろうとも、あの優しく輝かしい心を忘れない限り、この身が喪月神の駒に堕することはない。
「行ってくる」
イーダルドに言い置いて、伽羅は真実へ到る一歩を踏み出した。
後戻りはできない。
優しく強くけれど傷つきやすい人、苦しくとも前を真っ直ぐに見つめて生きる人、貧しさや悲しみに打ちのめされながら、それでも必死に生きようとする人――そんな、大切で愛しい人たちがいるこの世界を終わらせないために……喪月神を刺激し活性化させる邪気や瘴気を見逃すわけにはいかない。
膨れあがった瘴気によって、自らを瘴気に染め眠りにつくことで、世界を守ろうとした創造女神の目覚めを促すような事態を――決して許すわけにはいかない。
固い、固い決意を胸に、彼女は邪気の源の品があるはずのオズローン・ナージエの

屋敷に足を踏み入れたのである。

7

（何てことだ）

焦る心を必死に抑えながら、セイタマールは伽羅たちが待つ宿へと急ぎ戻っていた。

思った以上に調査に手間取ったことが彼を苛立たせていた。

判明したのは、無視しがたい数々の一致……あるいは近似。

伽羅の引き寄せ体質は、やはり今回も真実への最短の道を示していたのだ。

数年前、オズローン・ナージエが演奏会を開いた街の近隣で、聖石の子供の墓が暴かれていた。そして、ある時期を境に墓荒らしはなくなり、代わりに――聖石の子供が姿を消す事件が起こり始めたのだ。

名の知れた大きな街でなかったため、位置を確認するのに時間がかかったが、行方

が知れなくなった聖石の子供たちは、全員が彼が演奏会を開く時期の前後にその近隣の土地から姿を消していたのだ。

ひとりやふたりなら、偶然ということも考えられるだろう。

だが、三件も重なれば、それは偶然とは言わない。

墓荒らしの件も含めれば、実に十件近い一致を見せたのだ——これを怪しまずに、何を怪しめというのか。

（本人か、あるいはそのそばにいる者か……）

事件の犯人が、オズローン・ナージエとは限らない。

だが、間違いなく彼かその周囲に、聖石の子供を脅かす人間が存在するのだ。

犯人がなぜ、聖石の子供を狙うのか、その理由はわからない。

しかし、伽羅が耳にした邪気の叫びを思えば、行方の知れなくなった子供たちが辿った運命は自ずと知れる。

『いやだ……いやだ……殺してやる……』

『殺されたんだ、殺して何が悪いんだ……』

『許せない……あいつ……』

そして、暴かれた聖石の子供たちの墓――。

恐らく犯人は、生きた聖石の子供を必要とはしていない――。

だとしたら。

（伽羅！　不用意に近づくなよ！）

目を放せば、すぐに危険に飛び込んでいく相棒のことを思い、セイタマールは必死に念じた。

（相手は聖石の子供の命など何とも思っていない……いや、その死を前提に、子供たちを狙っているんだ！）

不法に流通させれば莫大な富を生む聖石の子供石が目的ならば、子供たちは少なくとも命の危険に晒されることはない。

だが、犯人の目的が子供たちの死がなければ手に入らない何かだとすれば――。

犯人が伽羅に気づけば、きっと彼女は狙われる――あれほどに力に溢れた聖石の子供は大陸中を捜しても見つかるものではないのだから！

宿に近づけば近づくほどに、セイタマールの不安は大きくなっていく。

あるいは彼は、ただ気づかぬふりをしていたのかもしれない——膨らむ不安と恐怖から目を逸らしたかったのは……杞憂だと片づけてしまいたかったのは。

伽羅の、事件の真相を引き寄せると同時に、危険をも招き寄せる引力を、今回ばかりは信じたくなかったのだ。

だが、それは無駄な足掻きに過ぎなかった。

宿に戻るなり、セイタマールはそのことを思い知らされた。

そこに、伽羅の姿はなかった。

「あ、兄ちゃんやっと来た。遅いぞ。おかげでおれ、ちいちゃんから置いてきぼりにされちゃったじゃないか」

退屈だったのか、寝台の上でごろごろしていたイーダルドが、不満そうに告げる内容に、心臓が大きく脈打った。

「イーダルド……伽羅は……？」

まさか、という思いが湧き上がる。

認めたくないが、こうした予感が外れたことはこれまで一度もなく、だからこそ心臓が凍えるような恐怖がじわりと広がるのだ。

果たして――。

「ちいちゃんなら、昨日のお姉ちゃんに呼ばれてオズローンの屋敷に行ったよ。ちいちゃんがあげた水晶のヒビが消えちゃったんだって。それで新しいお守り石持って、ちいちゃん出掛けたんだ。なあ、それってやっぱり、邪気の源があの屋敷にあるってことだよな。ちいちゃんひとりじゃ危ないから、すぐに追いかけようって思ってたのに、兄ちゃんなかなか帰ってこないんだもん」

少年の言葉の後半は、セイタマールの耳に入っていなかった。

（伽羅……あの……）

「馬鹿がっ！」

叫ぶと同時に、勝手に足が動いていた。

荷物に駆け寄り、布に包んだままの剣を摑む。

かつて、初めて組んだ女性の命を奪った剣――だが、二人目の相棒の命を救うため

には、これが必要なのだと直感した。
そして――。
オズローン・ナージエの屋敷を目指して、セイタマールは走り出した――。

「兄ちゃん！　兄ちゃん、待ってよ！」
どんどん遠くなる背中を、イーダルドは必死に追いかけた。
「兄ちゃんってば！」
自分の声が聞こえていないわけでもないだろうに、セイタマールの足は止まらない。
そんな彼を追いかけながら、イーダルドは走っているからという理由だけではない、胸が苦しくなるのを感じた。
（さっきの、兄ちゃんのあの顔……）
伽羅がオズローン・ナージエの屋敷に行ったと告げた時、セイタマールの顔から表

情と呼べるものが消え、見る間に色を失った。
（まるで死人みたいな顔になって）
そして、何も言わずに剣を手に駆け出したのだ。
セイタマールが出掛けた先で、何を調べてきたのかは知らない——だが、あの顔とそのあとの彼の行動を見れば、オズローン・ナージエを危険な人物と見なしているのは間違いない。
そんな男の屋敷を、ひとりで訪ねていった伽羅。
（ちいちゃん！　ああ、おれの馬鹿！　なんでおれは一緒について行かなかったんだ！　兄ちゃんには書き置きのひとつも残しておけばよかっただけなのに……何で、ちいちゃんにもっと食い下がらなかったんだ！）
自責の念が、どんどん大きくなる。
もし、そのせいで伽羅の身になにか起こったら、自分は決して自分を許せないだろう。
がんがんと耳鳴りがする。

遠ざかる背中に、セイタマールの必死さが透けて見えて、イーダルドの不安を煽り立てる。

（ちいちゃん、ちいちゃん、どうか無事で……ああ、神様！　どうかちいちゃんを守ってください！　ちいちゃんはいろいろずれたところもあるけど、立派な力と心を持つ、聖石の子供なんです……これからも、たくさんのひとを助けるひとなんです！）

生まれてこれほど必死に祈ったことはない。

神様を信じていないわけではないけれど、どこか遠すぎる存在で、だからちっぽけな自分の声など届かないだろうと思っていたから。

けれど、今――今は。

喉が張り裂けるほどに声を張りあげてでも、届けさせたい願いだから。

（どうか……神様！　ちいちゃんを死なせないで！）

遠い背中を追いかけながら、イーダルドはただひたすらに祈っていた。

フィランタ・オーディオルは、師の屋敷の執事に対して苛立ちを隠せずにいた。
彼女は数年前までこの屋敷に毎日通っていた弟子であり、突然の訪問も許された人間だった。先日訪れた時も、顔を見せるだけで中に通された。
それなのに、どういうわけか、今日に限って門前払いされようとしているのだ――サンネイドを伴って訪ねてきた今日のこの日に！
「お出かけなら、中で待たせていただくと言っているじゃないの。これまでも何度かあったことよ」
フィランタとて、これが師の屋敷でなければ、こんなことは言わない。
留守なら出直すか、門前で待つかするだろう。
だが、ここは違う――この屋敷は彼女にとって、もうひとつの我が家であり、師と共同の『音の研究施設』でもあるのだ。
連音をより高めるための資料や機材は、もちろん独立するとき自宅にも用意したが、この屋敷のそれとは量も質も違いすぎる。

だから、それを見越したオズローンが、いつでも出入り自由の許可をくれたとき、ありがたくその好意を受けたのだ。

以来、この屋敷で彼女が拒まれたことはない——拒んではならないと、屋敷の主人が家人に命じたことだった。

なのに、なぜ、今日に限って拒まれるのか。

あり得ないはずの事態に、フィランタは苛立つと同時に不安を覚えていた。

「今日は師にこの子を紹介したくて連れてきたの。どうしても、会わせたいのよ」

サンネイドを示してそう訴えるのだが、執事は頑なに頭を振るばかりだ。

「フィランタさまが主にとって唯一のかけがえのない弟子でいらっしゃることは存じ上げておりますが、今日だけはどうか、お引き取りください。誰も通してはならぬと、主から固く言いつかっておりますれば」

馬鹿な、とフィランタは叫びそうになった。

オズローンがそんなことを言うはずがない——そう断じたかったが、なぜかそれができなかった。

以前の彼なら、確かにこんなことはあり得なかった。断言できる。
だが、現在の彼が彼女を拒むことがあり得ないとは……言い切れない。
いつからか変わってしまったオズローンの音が、彼女にそう告げていたのだ。
かつてのオズローンが奏でる音は、今ほど完璧ではなかったかもしれないが、彼の人柄そのままの温もりを纏っていた。
音に温度などないが、そうとしか表現できない響きを放っていたのだ。
それが、いつを境にか、消えてしまった。
音はより洗練され、耳にするだけで震えるほどの美しさを纏ったというのに、それはただの無温の音だったのだ。
澄み渡った音は不浄を浄化する力を得、彼は奇跡の連音奏者として名を馳せたが、フィランタは以前の師の音のほうが好きだった。当時の彼は、音に思いや祈りを託していたからだ。
（昔の師に戻ってほしいと思うのは、わたしのわがままなのかしら）
聴くほどに洗練されていく彼の音色に、そんなことを思ったこともあった。

だが、そうではない——連音はやはり、単なる音の連なりであってはいけないのだ。

半年前、どこで調べたのかサンネイドが自分の屋敷を訪ねてきたとき、持っていた粗末な音叉と石で未熟な音を生むのを聴いた時、はっきりとそう思った。

響かせることもできないその音には、確かにサンネイドの願いや祈りが宿っていた——そう、かつてのオズローンの音のように。

だから、フィランタはサンネイドの弟子入りを許したのだ——彼の音を磨き、その上でオズローンにその音を聴かせたいとそう思ったから。

サンネイドの音は、自分よりずっと、オズローンのそれに近かった。

彼の音を聴けば、オズローンは以前の音を思い出してくれるのではないか。音に厳しい彼の耳に通じる程度にサンネイドを鍛え上げたのは、そうした計算もあってのことだ。

それが、拒まれた。

もう遅いのだと宣告された気分だった。

（師よ……あなたはいったい、何に魅入られてしまわれたのです……？）

ひたひたと心を侵していく悲しみに、フィランタは泣きそうになった。
（本当に、もう遅いのですか？　あなたはもう、元のあなたに戻ってはくださらないのでしょうか……？）
問いかける相手はここにはいない。
そんな彼女を気遣うように、サンネイドが小さく声をかけてきた。
「先生」
大丈夫ですか？
声にならぬ声が聞こえ――そして、フィランタは不甲斐ない自分を叱咤した。
（弟子に心配をかけてどうするの。悲しむのは、師が本当にわたしを拒んだときでも遅くはないわ。そう……それを確かめてからで）
そのためには、今日は出直そう。
もしかしたら、本当に重大な事態が持ち上がっているのかもしれず、そのことを彼が自分に知られたくないと思っているのかもしれないのだから。
そう心を切り替えた時のことだ。

「なんなのですか、あなたは⁉」

自分の剣幕にも動じなかった執事の動揺した声が聞こえた。

何事かと顔を上げると、鮮やかな赤い髪をした青年が、無理矢理屋敷の中に入ろうとしていた。その右手に握られた細長い包みの存在が、フィランタの心をかき乱した。

（あれは、剣？　いったいこの男は何者なの⁉）

疑問の答えは、不完全ながら男の言葉がもたらした。

「おれの連れが来ているはずだ。迎えに来た。返してもらう」

そう言いながら、彼が首元から引っ張り出したのは、血を思わせる深紅の輝きを放つ、大粒の石を用いた首飾りだった。

余計な装飾が施されていないだけに、男が身につけていてもおかしくはない品だ——だが、フィランタが驚かされたのは、その台座の部分に刻まれた紋のせいだった。

「地神神殿の……」

思わず洩らした呟きを、すぐ横にいるサンネイドが拾わないはずがなかった。

「地神神殿の紋が刻まれた首飾り……初めて見るけど、間違いない……使徒さまの聖

石だ！」

放たれた言葉の威力は大きかった。

それまで必死に青年を止めようとしていた執事の動きが、凍りついたように止まった。

「聖石の使徒さま⁉」

「確認したければあとで神殿にでも問い合わせてみろ。そういうわけで、おれは組んでいる連れを迎えに来たんだ。通してもらうぞ」

そのまま、扉に手をかけようとする青年に、我に返った執事が取りすがった。

「使徒さま！　失礼ながら、使徒さまは何か考え違いをなさってらっしゃいます！本日、この屋敷にはどなたも……」

訪ねてなど来なかった――そう続けるつもりだったのだろう執事の体は、しかしふわりと宙に浮き、次の瞬間地面に転がされていた。

「いるかどうかはこの目で確かめさせてもらう。本当におれの勘違いなら、いくらでも正式に謝罪してやるから、退いてろ」

邪魔をするな——全身から炎のような怒りを放ちながら、青年が命じる。
強烈な怒気に、向けられたわけでもないフィランタまで足が震えそうになった。
だが、黙っているわけにはいかない、と彼女は必死に一歩踏み出した。
この怒気——そして、あの剣。
放っておいたら、とんでもないことになりかねない。仮にも使徒に選ばれた人間が、無意味な暴力を揮うとは思えないが、万が一ということもある。
「わたしが案内します。この屋敷のことは隅々まで知ってますから」
ねめつけるように宣言すると、青年は無表情のままこくりと頷いた。
「なら、頼もう。時間が惜しいからな」
そのまま歩き出す青年のあとを追いながら、サンネイドに待っているよう告げようと振り返った時だ、新たな声の主が飛び込んできた。
「兄ちゃん！　待ってって！　兄ちゃん……って、ええっ！　ネイちゃん!?」
この声に弾かれたように顔を上げたのはサンネイドだった。
「イー!?　イーダルド、お前どうして白谷にいるんだ!?」

「ネイちゃん捜しに来たに決まってるだろ！　ああ、ネイちゃんが無事でよかった……けど、今はそれどころじゃないんだ！　兄ちゃん！　ちいちゃんは⁉　ちいちゃんは見つかった⁉」

飛び込んできた少年の問いに、一旦立ち止まった青年が短く答えた。

「これから捜す」

その言葉に、少年は当然のように青年に近づき、宣言した。

「おれも一緒に行く。邪魔は絶対しないから……駄目だと言われてもついていくから！」

少年に、青年は何か言いかけたが、結局無言のまま歩き出した。

時間が惜しいというのは、かけ値なしの本音なのだろう。

一体何を、彼らは恐れているというのか――考えると恐ろしい答えが出てきそうで、フィランタはそれを振り切った。

「先生」

背後から、サンネイドが近づいてくる。

「同じ施設で育った弟なんです。放っておけません。ぼくも行きます」
揺るぐことのない決意に満ちた声に、フィランタも説得を諦めた。
「お叱りなら、あとでわたしが受けるから」
玄関の石畳に座りこんだままの執事にそう声をかけ、彼女もまた屋敷に足を踏み入れた。
隅々まで知っているはずの屋敷が、いつの間にか別の何かにすり替わったような、得体の知れない場所になってしまった錯覚を覚えながら、彼女は唇を噛みしめた——。

8

オズローンが初めてその音を耳にしたのは、響波の地神神殿を訪れた時のことだった。

玉響による浄化の儀式を見るのが目的だった。

音叉を用いない聖石の子供石だけが奏でる音は、澄み切った清浄な波動を放ち、その清さに感動を覚えはしたが、彼は結局自分の奏法を変えようとは思わなかった。

音叉と石が生み出す音の、えも言えぬ余韻は、玉響には見られぬものだったからだ。

だが、訪れたことは無駄ではなかった。

どれほど上質な石であろうとも、聖石の子供石の奏でる音にはかなわないことがはっきりわかっただけでも収穫だった。

満足できるだけの質と大きさを考えれば、必要な数の子供石を揃えるためにはかなりの出費を強いられることはわかっていたが、彼は気にしなかった。

もともと、金をつぎ込むような趣味を持たない彼には、ここ数年の収入の大部分が手つかずで残っていた。

さて、ではまずはどの石から集めようか——。

そんなことを考えていた時、運命の音が、彼の耳に届いたのだ。

リィィィィン。

これまで聴いたこともない、また生み出したこともないような、澄んだ音色が鼓膜を震わせた。

音の源を求めると、それは神官が運んでいた四角い白い箱だった。

中身を尋ねると、不幸にも旅先で命を落とした聖石の子供の遺骨と、遺品であるその子供石なのだという。

オズローンが聴いたのは、遺骨と聖石の子供石が触れ合って生まれた音だったのだ。

彼はその音を忘れることができなかった。

何としてももう一度、あの音が聴きたいと、いや生み出したいと思わずにはいられなかったのだ。

だが、それは不可能だ。

聖石の子供の遺骨など、手に入れられるわけがない。世界のために瘴の女神の眠りを守る聖石の使徒や子供の骨を、連音演奏に使いたいなどと言えるはずがない。

当時はそのぐらいのことはわかっていたのだ。

だから彼は必死にその音を忘れようとした。だが、忘れようとすればするほど、彼の記憶は鮮明さを増し、日毎夜毎、二度と聴けない音を繰り返し再生した。

そして、ついに彼は禁忌に手を伸ばしたのだ。

演奏会に赴いたある地で、近隣の村に聖石の子供が葬られていることを知った彼は、それ以上自分を抑えることができなかった。

罪悪感に震えながら、墓を暴いて骨を盗んだ。

あの音がどの部位の骨によって生み出されたかわからなかったから、全部を盗んだ。

そうして、それらと子供石とで音を生み出した。

以来、彼はその音しか美しいと感じなくなった。
これまで自分が生み出してきた数々の音が、何の価値もないものに変わった瞬間、オズローンはだが落胆を覚えたりはしなかった。
ようやく真実の音に出会えたことに歓喜する彼は、自分の音から温度が消えてしまったことについに気づくことはなかったのだ……。

目覚めた時、伽羅はそこがどこで、自分がなぜそこにいるのか、全く理解できなかった。
目に映るのは見知らぬ天井——起き上がろうとして、それがかなわぬことで、自分の四肢が四角い石の台に縛りつけられていることを知った。
他には何もわからない——いや、もうひとつだけはっきりとわかることがある。
それは——。

噎せ返るような強烈な瘴気と邪気が、この部屋中に溢れているということだ。

（ナスキーアさんに憑いてたものだけじゃない……）

滾る憎悪と尽きることのない悪意と怒り――それらが渾然一体となって、空間をどす黒く染め上げている！

一息ごとに、不可視の毒に肺腑が灼かれる。

耐え難いまでに不浄に満ちた空間だった。

（こんな……一体何人分の恨みや憎悪が集まれば、こんな邪気や瘴気が生まれるんだ？　耐性のない人間なら、一瞬で自我を奪われ、支配されるぞ）

誰が何の目的で、こんな空間を作り上げたのか。

いや、作り手はわかっている。

自分に薬入りの茶を勧め、意識を奪って拘束した人物の顔を思い出し、伽羅はきり、と唇を噛みしめた。

屋敷を訪ねた彼女は、なぜかナスキーアの私室ではなく、屋敷の応接室に通されたのだ。

そして、彼女を待っていたのは言伝をしたという女性ではなかった。

演奏会で一度だけ目にした、オズローン・ナージエがにこやかに挨拶してきたのだ。

客人が来るとは知らず、ナスキーアには買い物を頼んでしまった、と彼は言った。

すぐに戻ってくるはずだから、それまでお茶でも飲んで待っていてほしい、と。

また昨日のナスキーアの件にも触れてきて、主人として礼を言いたいと思っていたのだ、とも。

にこやかに、穏やかに話しかけてくるオズローンに、危険なものを感じ取れなかったのは、恐らくは彼が生来持っている強い気のせいだ。

これほどの邪気を生み出しながら、彼自身はその負気に侵されることがない。彼の演奏が邪気を祓うのも、石の力だけが理由ではないのだろう。

稀に、そういう人間がいる。

だからこそ——気づけなかった。

普通の人間が、これほどの邪気に触れ続けていれば、必ず何らかの異変が生じるところを、強すぎる気を纏うがゆえに、何の変調を来すこともなかったのだろう。周囲

の誰も、だから彼の罪に気づけなかった。
殺人を重ねる彼を、誰ひとり疑うことさえしなかったのに違いない。
（何てことだ……）
瘴気が放つ毒気のせいで、ずきずきと頭が痛む。
（息をするのも苦しい……こんな瘴気、わたしの手持ちの石だけでは浄化も封印も無理だ）
残された方法はひとつしかない。
自分の体内に一度全ての瘴気と邪気を取り込み、それをセイタマールの聖剣で浄化してもらうしか――。
この二年、何度かやったことだ。
だが、今回は事情が違う。以前の伽羅は男女どちらでもなかった――だから、セイタマールは……女性に手をかけるという意識を持たずに剣を振り下ろすことができたのだ。
伽羅が女性になってしまった今、彼にそれができるかどうか。

（セイの心の傷を開くような真似、本当はしたくない）

だが、この邪気と瘴気を放置するわけにはいかないのだ。

神殿に報告し、あとは任せるという手は使えない——この国には今現在、瘴気の浄化を得意とする使徒がいないのだ。他国に要請して使徒を派遣してもらっていては、あまりにも時間がかかりすぎる。その間に、この邪気に触れて被害を受ける者が出ないとも限らないのだから。

果たしてどうすべきなのか——本当に、他に方法はないのだろうか。

激しくなっていく頭痛を堪えながら、伽羅は必死に浄化の方法を考える。

その、時だ。

チリィィン……リィィィン。

澄み切った音が空間に響き渡った。

（この音……は……）

ぎくりとして、伽羅はそろりと音のしたほうに顔を向けた。

はたして、そこにはオズローン・ナージエが真っ白な音叉と聖石の子供石を手に佇

んでいた。
ただの音叉ではない――そこに絡みつく悲しみと苦痛の茨が、伽羅の目にははっきりと見えた。
そして、子供石は――本来清浄な力を放っているはずの聖石の子供石は。
大きすぎる歪みにその力を歪められていた。
歪にねじ曲げられて力を放つ子供石は、苦しげに震えているようにしか伽羅には見えなかった。
（酷い……どうして、こんなことに……）
漆黒の双眸を大きく瞠る彼女に、オズローンは嬉しそうに笑いかけた。
「やあ、目が醒めたんだね」
その声は本当に嬉しげで、空間を満たす苦悶も怨嗟も憎悪も――何も感じていないようだった。
「あなたは……」
どうして。

問いかけたいが、声が上手く出なかった。
瘴気の毒気が喉を灼いたからだけではない。どんな言葉なら、彼の心に届くのか、どうしてもわからなかったのだ。
オズローンが再び白い音叉と子供石で音を奏でた。
生み出された音に、彼は陶然と目を閉じる。
「美しい……至高の音だと思わないかい？」
何を言われたのか、伽羅には理解できない。
（美しい？　至高の音？）
どうしたら、そんな風に思えるというのか。
伽羅の耳には、その音は、無残に摘み取られた命の苦悶に満ちた叫びと、無理矢理歪められた苦痛に悲鳴をあげているようにしか聞こえないというのに！
「なにを……」
あなたは言っているのか。
伽羅の瞳に浮かぶのは、愕然たる思いと、深い深い悲しみだった。

なぜ、どうして――これほどに無残な空間で、悲痛な音を生み出し喜べるのか。
しかし、彼女の思いがオズローンに伝わった様子はなかった。
「わからないかい？　君のように力に溢れた聖石の子供が、優れた耳を与えられなかったのは残念なことだね。この音色の素晴らしさがわからないだなんて」
同情をたたえた目を向けられても、伽羅は怒りを覚えることはなかった。
（悲しい……このひとは、なんて悲しい……）
優れた天与の才がありながら、なぜこんな道を進んでしまったのか。
なまじ稀有なまでの強い気を生まれながらに纏っていたせいで、彼は未だに自らの過ちに気づかない――。
それどころか、彼は自らのおぞましい成果を誇ってさえいるのだ。
「ここまで辿り着くのに、わたしがどれほど試行錯誤を繰り返したか、わかるかい？　最初は聖石の子供の骨と石の触れ合う音から始まったのだよ。その音が忘れられずに、墓を暴いて骨を手に入れた。だが、記憶の中の音ほど綺麗なものは生まれないんだ。単なる骨では駄目なのだと、気づいてからは研究に没頭する日々だったよ」

誰にも打ち明けるわけにはいかない研究と努力の数々を、オズローンはとくとくと語り始める。

彼は誇りたいのだ、自分の成果を。

だが、それが世間に認められるものでないことはさすがにわかっている。だから、彼は世間に広める心配のない相手に、こうして語りかけたのだ。

そう……間もなく自分が摘み取る命の主に。

いったい何人の命をこのひとは奪ったのか……。

魅入(みい)られ、記憶の中で美化した音を再現する——そのためだけに、どれだけの魂(たましい)が踏みにじられたのだろう。

失われた命を思い、深い悲しみに暮れる伽羅をよそに、オズローンは得意げに話し続ける。

音を長く響かせるために、骨を音叉の形に削りだしたこと。硬度的な問題が生じ、それはうまくいかなかったこと。硬度を出すために骨を細かく砕いたものを上質の陶石の粉末と混ぜ合わせ、高音の炎で焼きあげた音叉が素晴らしい音を生んだこと。

「あの時の感動は忘れられないよ」
うっとりと、当時の記憶をたどりながら、オズローンはしかしすぐに沈んだ様子を見せた。
「だが、もっと美しい音を生み出せるはずだと思い直したんだよ、わたしは。墓から盗んだ骨では、純白の磁器の音叉は作れない……そのためか、音が透明になりきれていないように感じられたしね」
そして、それは正しかったのだと、罪悪感のかけらも示すことなく男は告白した。
純白の、聖石の子供の骨を求めた時、それは自分で作り出さない限り手に入らないと気づいたのだ——と。
「それからいくつもの音叉を作ったんだが、すぐに満足できなくなるんだよ。もっといい物が作れるはずだ、もっと美しい音を生み出せるはずだと。それで、ひとつ気づいたのは、もしかしたら材料の質にもこだわるべきではないかということでね」
そんな時に、君のことを知ったのだよ。
かつり、かつり——靴音（くつおと）が近づいてくる。

そして伽羅を間近に覗きこんできたオズローンの手に、握られていたのは音叉ではなく、鋭利な短剣だった。

思わず息を呑んだ彼女の頬に、彼の空いた左手がそっと触れた。

これほどの邪気と瘴気が渦巻く空間で、それでも彼の手は負気に侵されてはいなかった。

「君は美しい……この目で見て確信したよ。君は稀有な子供だと」

賛美の声を上げながら、彼の目は伽羅ではない別の物を見つめている——そう、彼女の皮膚と肉の下に隠されている骨をこそ、彼は見つめているのだ。

「わたしを殺し、わたしの骨で音叉を作っても、あなたはすぐに満足できなくなるでしょう。あなたは理想を高め続ける。あなたの中にだけ存在する、あなたが美しいと思っている悲しい音を」

伽羅のこの言葉に、オズローンは驚いたように目を瞠った。

「悲しい？　音にそんな感傷的な不純物は必要ないよ。音はただ純粋に澄み渡り、美しく響けばいいものだ」

「本当にあなたがそう思っているのなら、あなたの耳と感性は、二流……いや、三流以下だということです」

この状況で、オズローンの機嫌を損ねる真似はすべきではない――わかってはいても、伽羅は言わずにはいられなかった。

ぴくり、と眉宇を震わせた彼に、彼女はなおも言い募った。

「なぜわからないのです。あなたの求める美しい音のために犠牲になった魂たちは、この部屋に繋がれてもがき嘆き苦しんでいるというのに。わたしの耳にはあなたが奏でるのは死者の悲鳴や嗚咽や苦悶の声にしか聞こえない。美しい音には聞こえません」

はっきりと伽羅が言い切ったその直後――。

彼女は左の首筋に、ざくり、と熱とも痛みともつかぬ衝撃を覚えた。

生温かい何かが皮膚をつたい、服を濡らしていく――その感覚でようやく彼女は自分の身に何が起こったかを悟った。

「君は声も美しいけれど、囀る内容は聞くに堪えない……もういい。君はわたしの音

叉として、わたしの手の中で至高の音を生み出せばいい」

冷ややかに告げるオズローンの手に握られた短剣が、深紅を滴らせながら銀色に輝いていた。

伽羅は斬られた首の傷から、命が流れ出していくのを感じた――。

9

じりじりと胸を灼くのは焦りの焔だ。

「そんな……ここにもいないだなんて」

呆然とした声を洩らすフィランタの声を聞きながら、セイタマールは剣を摑む指に力をこめた。

オズローンの弟子を名乗る女性――フィランタに案内された最後の部屋にも、伽羅の姿はなかった。

ただそれだけであったなら、フィランタはこんな声は出さなかったに違いない。執事である男が最初に言った通り、この屋敷を訪れた客人などいなかったのだと、セイタマールの誤解だったのだと、彼に謝罪を求めたことだろう。

だが、姿が見えないのは、伽羅だけではない。
この屋敷の主の姿もまた、屋敷のどこにもなかったのだ。
その事実がフィランタを動揺させている。オズローンが不在なら、執事はそう告げたはずだからだ。
だが、彼が命じられた内容は、誰も屋敷に入れるなというものだ。
オズローンが留守なら、その命令はおかしい。
しかし、彼の姿が屋敷のどの部屋にもないというのも厳然たる事実だ。
(最悪だ)
考えられる事態は、セイタマールの不安と恐怖を掻き立てるものでしかない。
おそらく、オズローンと伽羅は、どこか隠された空間にいるのだ。
「弟子であるあんたも、隠し部屋のことは聞かされていないのか」
責めるつもりはなかった——もし、オズローンの目的が聖石の子供の死の果てにしか手に入らないものならば、彼がそのために用意した場所を、他者に洩らすとは考えられないからである。

狡猾さ、周到さ、そして驚くほどの用心深さ――それら全てを併せ持つ者でなければ、十人近い聖石の子供の失踪に関われるはずがない。墓を暴いたことまで含めれば、彼の犯した罪は十五を超えるのだ。

その事実が、セイタマールの心に重くのしかかる。

家人たちに気取らせることなく、それだけの罪を重ねてきた男なら、隠し部屋の存在を知るのも彼ひとりに違いないからだ。

まず間違いなく、伽羅はそこに連れ込まれたのだ。そして、片手の指ではきかないほどの命を奪った男もまた、そこにいる。

オズローンの目的が伽羅の死の向こうにしかないのなら、彼が彼女をいつまでも生かしておくとは思えない。

今まさに、その手が彼女の命を摘み取っているかもしれないのだ！

（冗談じゃない）

自分が伽羅から離れようと思ったのは、彼女を傷つけ、ことによっては命を奪いかねない最大の脅威となる自分から彼女を守るためだった。

自分から離れれば、それだけ彼女の身は安全になると考えただけだ。

こんな……自分の目の届かない場所で、彼女の命を危険に晒すためでは断じてなかった。

（このまま、伽羅を永遠に見失うなど認められるものか！）

夢枕にでも立たれた日には、自分は生涯後悔し続けるのが目に見えている。

そんな後味の悪い人生など御免被る。

セイタマールは唇を噛みしめ、フィランタを振り返った。

「オズローンの私室を調べる。ひとり暮らしならともかく、住み込みの家人がいるにも拘わらず、誰にもその隠し部屋のことを気づかせなかったというのなら、籠もっても誰も気にしない部屋から出入りしているはずだからな」

完全防音設備を施した練習室は、フィランタにも開放していたという話だから可能性としては外して構わないだろう。

焦る思いを押し隠し、再度オズローンの私室と寝室を調べたが、隠し部屋に続く扉らしき仕掛けは見つからなかった。

セイタマールの胸を焦がす焔は大きく育つばかりだ。
もしこのまま、為す術なく伽羅を喪ってしまったら――そんなことはさせないと、思う端から不穏な仮定が脳裏に浮かび上がってくるのだ。
（落ち着け）
必死に自分にそう言い聞かせるが、すでに動揺している心は容易く従ってはくれない。
ぎりぎりと、剣を握る指に力がこもる。
と、その時だった――イーダルドが「ねえ」と声を上げたのは。
「何か、音が聞こえない？」
言われてセイタマールは耳を澄ませたが、それらしい音は聞こえない。
音に関しては門外漢である彼だけでなく、フィランタもサンネイドも首を傾げているところを見ると、聞こえているのは最年少の少年だけのようだ。
「気のせいじゃ」
ないのか――と彼が言い終えるより先に、反応したのはともに育ったサンネイドだ

った。

「イー。聞こえるって、どんな音が？　それとどの方向からかわかるか？」

真剣な顔で問うた少年は、こちらを振り返って説明した。

「イーダルドの耳の良さはぼくが保証します。彼が聞いたと言うのなら、確かに何かの音がしたんです」

ようやく再会できた兄貴分の言葉に、イーダルドは一瞬不安を忘れたように笑った。サンネイドに認められることが、心底嬉しかったのに違いない。

「あっちのほうから……床に体ごと倒れ込んだみたいな……違うな、床よりもっと薄い板に体当たりしたみたいな。そうだ、多分壁にだ！　それも子供か女の人！」

その言葉に、弾かれたようにセイタマールは動いた。

イーダルドの体を横抱きにして彼が示した方向に走り出したのだ。

「イーダルド！　どこから聞こえる？」

抱え上げられた少年の誘導に従って辿り着いたのは、意外にも応接室だった。

その壁の向こうから、確かに何か柔らかいものがぶつかる音を認めた瞬間、セイタ

マールは迷うことなく自らの剣を振り下ろした！

「兄ちゃん！　向こうにひとがいるのに何やってるんだよ？」

傍目には暴挙にしか見えないだろうその行為に、果たしてイーダルドが慌てたように文句をつけてきたが、セイタマールは構わなかった。

聖剣と呼ばれる彼の剣――彼が生み出した血赤珊瑚が散りばめられたその剣は、唯一の例外を除けば、生身の人間を傷つけることはない。

果たして、切り裂かれた壁の向こうから、支えをなくして転がるように現れた女性――手足を縛られ猿ぐつわを嵌められたナスキーアは傷一つ負っていなかった。

「お姉ちゃん！」

イーダルドが声を上げながら、彼女に駆け寄り、その縛めを解くと、ナスキーアは必死の声を張りあげた。

「下に！　この下のあの恐ろしい部屋に伽羅さまが……伽羅さまがっっ！」

皆まで聞かず、セイタマールは動いた。

ナスキーアの背後に見えた下り階段を駆け降りたのだ。

最後の段を駆け降りるのと同時に、行く手を阻む扉に向かって剣を揮う。
鍵がかかっているのか否かを確認する手間すら最早惜しい。
そうして飛び込んだ小さな部屋で——その隅におかれた石台の上に。
彼は捜し求めた相手の、最も見たくない姿を……見つけた。
漆黒の長い髪を自らの血で濡らし、象牙色の肌を蠟のように白けさせ——命の輝きを信じがたいまでに薄れさせて。
自らの命の終焉を、彼女は彼に見せようとしていた。
その傍らで、陶然と手にした刃を見つめる男の姿を認めた瞬間。
セイタマールの中で、何かがぷちり、と音を立てて切れた。
「貴様ぁっ！」
本能が発する怒りのままに、セイタマールは男に飛びかかり、剣を握りしめたままの拳を相手に見舞っていた。
男の体が吹き飛ぶのを確認する間も惜しんで、彼は石台に束縛されたまま、首から血を流す相棒の少女に駆け寄った。

「伽羅、伽羅！　返事しろ！」

すでにその顔色は蠟のように白い――首を斬られたことによる失血は、明らかに彼女の命を彼岸に連れ去ろうとしていた。

（させるものか）

どうして認められる。

生かしたい、守りたいと思って離れることを選んだ相手が、自分の目の届かない場所で命を落とすなど。

認められるわけがない！

「駄目だ、伽羅！　死ぬなんて許さない！　おれのそばにいれば、お前に死を近づけると思ったから離そうと思ったんだ！　おれがそばにいないのに……それなのに、お前が死ぬだなんて、そんなことが許せるわけがないだろうが！」

必死に訴えかけるが、伽羅の顔色は白くなるばかりだ。

首からの出血が彼女の命を奪おうとしている。

セイタマールはそう判断し、即座に自らの聖石の子供石を生み出した。

珊瑚は水の属性だが、赤という色彩は炎の属性をも宿す。
そして、赤い水は人間にとって命の水――血と同じだ。
セイタマールは生み出したそれを口に含むと、伽羅に口移しでその力を流し込んだ。
聖石の使徒であるセイタマールの生み出した血赤珊瑚の宿す力は、同じ珊瑚の属性を持つ伽羅の身に目覚ましい効果をもたらした。
首に走った大きな傷が、みるみるうちに塞がっていく。
失われた血のせいで、蠟のようだった顔に、徐々に色が戻っていく。
そうして、もしかしたら二度と開かれることがないのではないかと、恐怖とともに見つめた漆黒の長い睫が震えた時――セイタマールは思わず目を閉じた。
神に、世界に、運命に、あるいは偶然に――伽羅の命をこの世に引き留めてくれたあらゆる要因に純粋な感謝を覚えた瞬間だった。
まさにその一瞬に、伽羅が瞳を開いたことを、彼は気づけなかった。
その目が、邪気に対する大した耐性もない女性――フィランタが、この瘴気と邪気

が渦巻く恐ろしい空間に足を踏み入れようとするさまを捉えているとは。

思いも寄らぬことだったのだ。

「何なの、この階段は？　どこに続いているの？」

戸惑いも露に、それでも降りてくる女性――フィランタの存在に。

否。

気づけなかったのはそれだけではなかった。

その空間を満たし、渦巻いていた瘴気が絶好の駒として、フィランタを引き寄せようとしていたことにも。

彼は気づいていなかった。

気取ったのは意識を取り戻したばかりの伽羅だった。

そして彼女は、フィランタを瘴気の毒牙から護るために、声を張りあげ、生死の境から戻ったばかりのその身に部屋中を満たす邪気と瘴気を引き寄せたのだ！

瘴気にとって、最も魅力的な駒となり得る自らを餌として！

死にかけた……否、セイタマールが駆けつけなければ完全に死んでいたに違いない

その身に瘴気を受け入れることが、どれほどの負担かわからないはずもないだろうに、彼女はこんな時躊躇うことがない。

（酷いやつだ……お前ほど、残酷なやつをおれは知らない）

セイタマールの嘆きも知らず、伽羅を駒とするために、瘴気と邪気がその身に集う。

彼女を支配し、彼女を利用するために——それが彼女の目的だと気づくこともなく。

こうなってしまっては、セイタマールに選ぶ道はひとつしか残されていない。

「伽羅……この馬鹿！　この性悪！　何度おれの心臓を止める気だ？」

叫びながら、セイタマールは己の剣を伽羅の胸目がけて振り下ろす。

伽羅に集った瘴気のみを、剣の力で浄化する——それができなければ、自分は結局伽羅を失うしかないことを、痛いほどに彼は理解していた……。

息が詰まるほど濃密な瘴気が、小柄な黒髪の少女の肉体に収束していくのを、サン

ネイドは呼吸も忘れて見つめていた。
それは寸前まで自分の師であるフィランタを狙い、渦巻こうとしていたものだ。
あるいは自分も狙われていたのかもしれない。
だが、今、それらはかけらも残さず、少女の中に吸い込まれた。否、少女という極上の傀儡を支配するために、彼女に襲いかかっているのだ！
赤い髪と褐色の青年が、そんな彼女を詰りながら、血赤珊瑚を散らした剣を振り下ろす。
少女の命を絶つ行為にしか見えないそれが、彼女に集った瘴気だけを浄化していくさまを、サンネイドは声もなく見つめるしかなかった。
（何という……）
苛烈にして恐ろしい力。
あの剣にかかれば、どれほど強力な瘴気も邪気も浄化されずにはすまぬだろう。
だが、その力を揮うために、剣の使い手はいかほどの勇気と決断力を求められることか。

（これが使徒さま……使徒さまが揮う力……）

圧倒的な浄化の力。

だが、サンネイドにはそれは心を切り裂く力にも見えた。

信頼し、大切に思う相手に刃を向ける——それが相手を傷つけることはないとわかっていても、平然とできることではないはずだ。現に血赤珊瑚の使徒の剣を握る手は、微かに震えていたではないか。

相棒である少女に刃を振り下ろしながら、彼女を詰っていたではないか。

苛烈にして非情なまでの決断を、使い手に強いる力なのだ。

それに耐えられる精神力を持たなければ、使徒に選ばれることがないのだとしたら、使徒とは何と試練に満ちた存在であることか。

選ばれないという事実に、嘆いていた自分が恥ずかしい——自分には決して務まらない役目だと、サンネイドは心から思った。

それにしても——。

呆然と立ち尽くす師である女性の背後から、目にした部屋の光景は異様にしておぞ

ましい限りだった。

応接室にあったのと同じような硝子戸の棚に、整然と並べられた人骨の山。

その隣の台には、白い音叉が置かれている。

淡い燐光を放つそれらが、聖石の子供の命を奪うことによって生み出されたものだということは、サンネイドにもわかった。

さして強い感応力を持たぬ彼だが、骨と音叉の周囲をおぼろげな光が漂っているのはわかるのだ。

それは死者の魂だった。

オズローンによって墓を暴かれ、眠りを妨げられた者たち、彼に命を絶たれた者たちの魂が未だこの部屋に留まっているのだ。

無念の思いを凝らせた瘴気も邪気もすでにない。

それでも彼らの魂は、何かを捜すように漂っている。

（いったい、何を……）

捜しているのか――思った瞬間、サンネイドははっとした。

魂のひとつが、セイタマールに殴られ、意識を失ったオズローンに近づくなり、怒りの波動を纏ったことに気づいたのだ。

それらが次々に伝播していくのを見て、彼は知らず懐に手を伸ばしていた。

「駄目だ……駄目だ」

呟くような声は徐々に大きくなり、彼は怒りに染まる魂たちに向かって叫んだ。

「駄目だ。それは駄目だ。駄目だ！」

彼は必死に言葉を探しながら、魂たちに訴えかける。

「墓を暴かれ安らかな眠りを妨げられたのも、無残に命を絶たれたことも、あなたたちに非があってのことじゃない！　あなたたちに罪はない。悪いのはこの男だ。だけど……だけど！」

その無念はいかほどのものだろう。

想像するだけで胸が痛くなる。

恨むのは当然だ。憎むのも、復讐を願うのも。

事実、先ほどまでこの部屋は彼らの生み出した瘴気と邪気に満ちていた。

けれど――でも。

サンネイドは伝えずにはいられなかった。

「本当に、あなたたちは何も悪くない！　だけど、この男への怒りや憎しみに染まってこの男を害するのは、もう一度重い足かせを自分で自分につけることです！　せっかく、外してもらったのに……あんなどろどろとしたおぞましくてどす黒いモノから、せっかく解放してもらったのに、どうか、どうか繰り返さないでください！」

もどかしい。

言葉をいくら尽くしても、彼らの魂に伝わる気がしない。

サンネイドは取りだした音叉と自らの子供石――天河石（てんがせき）をそっと触れ合わせた。

リィィーン。

洗練されたとは言い難い、だが優しく澄んだ音が部屋に響いた。

魂たちの纏う怒りの色が少しだけ薄れる。

「あなたたちは悪くない」

もう一度告げて、彼は二度目の音を生む。

リィィィィィン。

「だから――」

心からの願いをこめて、彼は三度目の音を奏でた。

リィィン……ィィィン。

「どうかもう、安らかに眠ってください」

彼らの魂を悼みその行く末を案じる思いを乗せた音が、波となり室内を満たしていく。

ぽつり。

ぽつり。

その音の波に触れた魂が、怒りの色をなくし、そうして消えていくのを、サンネイドは安堵の念をもって見つめた。

魂たちが消えたわけではないことを、彼の感覚は正しく捉えていた。

魂は、この場に縛られる必要がないと知り、自ら行くべき場所へと去ったのだ、と。

鎮魂の連音奏者――。

後(のち)にそう呼ばれることになるサンネイドの、これが初めて奏でた浄霊(じょうれい)の音色(ねいろ)だった——。

終章

緋芭大陸の南端に位置する那八で、日差しが優しい春のものから、強い夏のものへと移り変わる頃――。

王都の地神神殿の長たるオサラディーンは、薄くはない封筒を手に、気にかけている配下の部屋を訪れた。

正式に那八に籍を移した黒髪の少女は、先日巻き込まれた事件のせいで今は療養中の身である。

医師が完治を宣言した時点で、使徒の任命を受けることになっているが、今はまだ伽羅の名で呼ばれている。

（無茶ばかりする子だから、寝台に縛りつけられた今の状況は、さぞ苦痛だろうな）

その性格をよく知るオサラディーンは、すでにほぼ完治状態にありながら、自由に出歩くことを相棒によって禁じられた少女に同情を覚えていたが、だからといって自分の権限で彼女に自由を与えるつもりはなかった。

そんなことをすれば、彼女の相棒である青年が、どれほど怒るか目に見えているからだ。

しかし、それも無理はないと思う。

白谷の王都で伽羅がした無謀な行為は、聞いたオサラディーンの心臓さえ一瞬凍りつかせたほどのものだったのだから。

失血死する寸前の状態で、十人以上の念が集まった瘴気と邪気を我が身に取り込むなど、正気の沙汰ではない。

そんな無茶を目の前でされた青年の心中を思えば、到底伽羅に肩入れできるものではない。

とはいえ、何もせずにいることが苦痛でしかない彼女のために、知りたがっているであろう知らせを届けてやるぐらいならいいだろう、と思う彼は、傍からは充分彼女

に甘い保護者といえただろう。

彼が持つ封筒の中身は、先日の事件の関係者たちのその後を知らせるものだった。きっと喜ぶことだろう。

そう思い、伽羅の部屋の扉をノックしようとしたオサラディーンは、室内から聞こえてくる芝居めいた声に首を傾げた。

声は伽羅のものだが、なにやらおかしい。

行儀が悪いことは百も承知で、扉に耳をつけてみる。

聞こえてくるのは、やはり伽羅の声ばかりだ。

が。

「……う、うるさいね……？　大の男が小さなことにこだわるんじゃないよ……」

明らかに棒読みとわかる声が、彼女らしくない言葉遣いの台詞を読み上げている。

「なに……肝の小さなこと言ってんだい……男だろ、しゃんとしな……」

台詞だけなら鉄火な女性が口にしそうな内容だが、ぎくしゃくした声で、しかも棒読みときては笑うしかない。

（お、可笑しい。今度はいったい、何を考えついたんだ）

特殊な環境で育った伽羅は世間知らずで、いろいろずれたところがある。

そのためか、あるいは生来のものか、彼女は時折突拍子もないことを言い出したりするのだ。それが普通は考えつかないようなことばかりなので、オサラディーンは内心楽しみにしていたりするのだ。

このまま盗み聞きを続けたいと思わないでもなかったが、噴き出すのも時間の問題だったため、彼は知らぬ顔をして声をかけた。

扉を開くと、伽羅は感心なことにきちんと寝台の上にいた。

ただし、半身は起こして、なにか書きつけてある帳面のようなものを広げている。

（棒読みの中身はあれだな）

そう見当をつけながら、オサラディーンは伽羅に笑いかけた。

「退屈してるんじゃないかと思って、土産を持ってきたんだが、読み物をしていたのならこれはいらなかったかな？」

封筒をひらひらと振って見せると、伽羅は不思議そうに首を傾げた。

「オサラディーンさま、土産って何ですか？」
「先日の事件の関係者のその後のことだ。気にしていただろう？」
そう告げた瞬間、伽羅の表情がぱっと輝いた。
「見せてください！」
寝台から転げ落ちんばかりの勢いで、身を乗り出してくる少女に、彼は焦らすことなく封筒を手渡した。
これがひねくれた配下の青年なら、彼は違う選択をしただろうが、素直な少女を相手に意地悪く振る舞う趣味はない。
封筒から取りだした関係者のその後を知らせる報告書を、一心不乱に読み始めた少女の姿を見守りながら、オサラディーンは配下の青年のこれからの苦労を思い、少しだけ同情した。
伽羅が女性になったことを知った当時、過去の傷を克服できずにいたセイタマールは当然のようにコンビの解消を言い出した。
その心境がわかるだけに、オサラディーンも無理やりコンビの継続を命じることは

せず、ただ伽羅が説得にあたる時間を提供するに留めたのだ。
それでも、セイタマールが頷くかどうかは五分の賭けだと思っていた。
しかし、白谷の事件のあと、那八に伽羅を連れ帰ってすぐ、彼は彼女と組み続けることをオサラディーンに報告してきたのだ。
理由を訊くと、「おれのそばにいるより、おれが目を離したほうがあっさり死にそうだからです」と、不機嫌な声で答えた。
なるほど、それぐらいなら近くで目を光らせていたほうが、精神衛生にもよろしかろうと、大いに納得したものだ。
（目が離せないのは伽羅だけではないんだがね）
ちらりとそんなことを思いながら少女に目を戻せば、小さく「よかった」と呟くのが見えた。
おそらくイーダルドが無事に故郷に戻ったことに対するものだろう。
白谷の事件は、あまりにも衝撃的すぎる内容ゆえに、犯人もその目的も公にされることはなかった。

無論オズローン・ナージエの身柄は拘束され、厳重な監視下に置かれている。死罪でも軽すぎると言われる彼が、今後どのような形で罪を償うことになるかは未だ決定してはいないが、全財産が被害者の遺族への補償に回されることだけは確かだ。

（あっさり殺すより、死ぬまで浄化の連音でこき使うのもひとつの手だな）

とは、オサラディーンの個人的な考えだが、芭蕉の副神官長あたりも、似たようなことを考えていそうな気がする。

サンネイドは結局、フィランタ・オーディオルのもとで修業を続けることにしたらしい。フィランタ自身は師である男の罪深さを思い、断ろうとしたらしいのだが、サンネイドの熱心さと事件の折に彼が見せた才能の片鱗ゆえに、彼の求めに応じたのだという。

ナスキーア・フォルスは、朱句を離れ、故郷に戻った。伽羅からもらった爆裂水晶は、すでに力を失っているが、彼女はそれを大切に持っているらしい。

小さからぬ心の傷を負っても、人間はそれを乗り越える力を持っているということだろう。

それは、聖石に選ばれた者であっても同じことだ。

（乗り越えられないような試練は与えられないのかもしれない……）

だとしたら、どんな絶望的な状況でも諦めさえしなければ道は開けるということだ。

我ながら青臭いことを考えていると思ったが、それはあながち間違ってはいないと彼は信じた。

「ところで」

伽羅が書類を読み終えるのを待って、彼は先ほどから抱えていた疑問を解くことにした。

「わたしが来る前、芝居がかった君の声が聞こえたんだが、何をしていたんだい？まさか演劇に目覚めたわけでもないんだろう？」

その質問に、伽羅は少し困った顔になった。

「あの……これ、芭蕉でお世話になった店の姐さんたちが参考になればと書いてくれたんです。練習できるように口語体で」

なるほど、棒読みは練習だったわけだと、ひとつ納得したオサラディーンだが、根

本的な疑問はまだ謎のままだった。

「でも、なぜそんな練習をすることにしたんだい？」

素朴な疑問を投げかけた彼に、伽羅はまた困った様子で、「セイには黙っててくれますか？」と問い返してきた。

「もちろん、君が知られたくないのなら、わたしが勝手に彼に話すわけがないよ」

そう請け合うと、安心したように彼女は理由を教えてくれた。

「セイが最初に組んだひとは、女性らしいたおやかなひとだったのでしょう？　わたし、女になった時、どうしたらいいか考えたんです。女性になってしまったことは変えられないから、せめてそのひとを思い出させるような大人にならなければいいんじゃないかと。それで、店の姐さんたちに相談したら、鉄火な口調を教えてくれたんです。これなら、少なくとも聞いた相手はたおやかだとか儚げだとかは思わないだろう、と」

それで、練習していたのだが、なかなかうまくいかないのだと。

大真面目にそう答える伽羅を前に、オサラディーンは爆笑するのを我慢できなかっ

た。

伽羅とセイタマールでは、セイタマールが振り回されていると考えていたのだが、どうやらそんな一方的な関係ではないらしい。

（きちんと愛されてるぞ、セイタマール）

ただし、その方向性が若干ずれていることは否定できないが。

腹が痛くなるほど笑いながら、オサラディーンは愛する部下たちの未来が明るいことを祈っていた――。

一カ月後、伽羅は正式に聖石の使徒として名を授けられた。

生まれながらに用意されていたふたつの使徒名のひとつを、ようやく彼女は自分のものとしたのである。

黒珊瑚の使徒カーラトーニ。

その日、彼女の使徒としての人生が始まったのである――。

あとがき

今年は花粉が例年の五倍から十倍も飛ぶという話ですが、この本が発売されるころ、わたしの鼻はどうなっているのか、不安を抱えております。

こんにちは、前田珠子です。

聖石の使徒番外編『狩人の宝』をお届けします。

前回の『狩人の覚悟』から、一年以上空いてしまい、申し訳ありませんでした。

伽羅とセイタマールの物語は、これにて完結となります（伽羅が伽羅じゃなくなりますから）。

次に聖石を書くときは本編の続きとなる予定です。目下完結に向けて進行中のシリーズがありますので、明確にいつとお約束できないのですが……、聖石も必ず完結させます。よろしければおつきあいください。

今年の冬は寒さが厳しく、おかげでクリスマスローズの開花も去年より十日ほど遅

れました。せっせと苗から育てた甲斐あって、今年はなんと十六種類もの花を見せてくれました。種が落ちて発芽したものも、すくすく順調に成長し、そろそろ植える場所に困る事態が生じつつあります。

母が植えた牡丹も今年は蕾をつけ、今から咲くのが楽しみです。

短いですが、そろそろ結びにさせていただきます。

イラストの山本鳥尾さまを始め、関係各所の方々には、今回も大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

次は破妖の予定です。

それでは、またお会いできることを願って——。

平成二十三年　春

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒

狩人の宝

COBALT-SERIES

2011年5月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子

発行者　太田富雄

発行所　株式会社 集英社

〒101－8050

東京都千代田区一ツ橋2―5―10

(3230) 6268 (編集部)

電話　東京 (3230) 6393 (販売部)

(3230) 6080 (読者係)

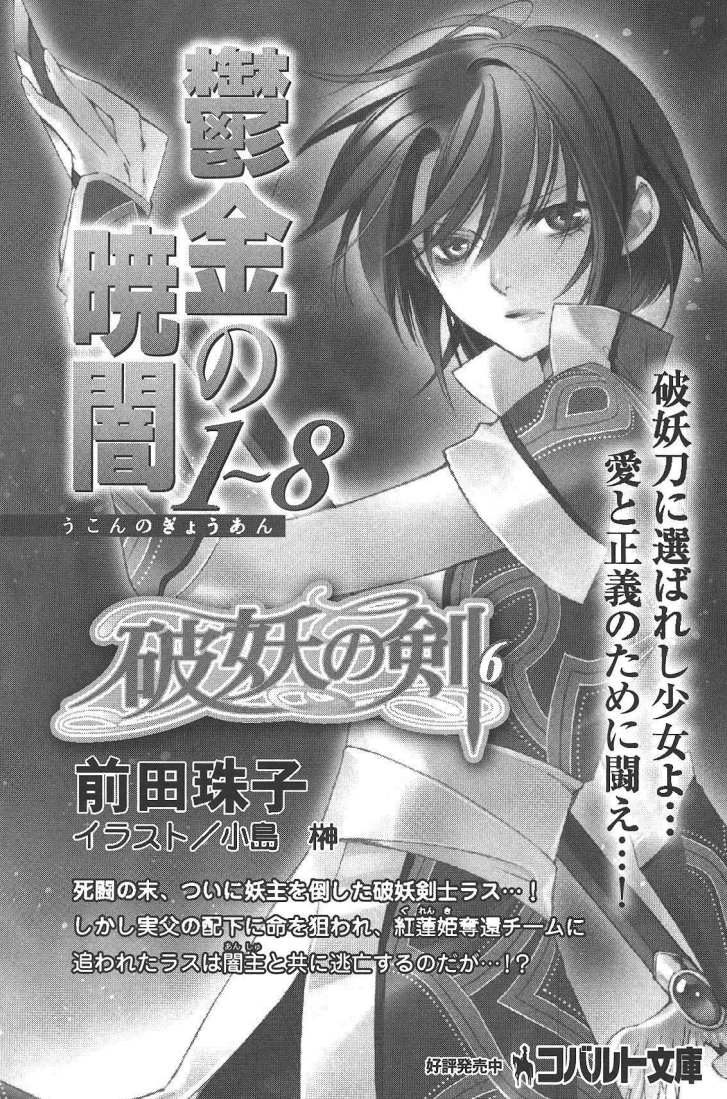
印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2011　Printed in Japan

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。なお、本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意下さい。

ISBN978-4-08-601521-9 C0193


前田珠子
イラスト／山本鳥尾
聖石の使徒
シリーズ
選ばれし子供たちが、世界を守る――!!
其は焔をまとう者
其は力を放つ者
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
揺籃の瞳
蒼の組木箱
狩人の爪
狩人の覚悟
コバルト文庫
好評発売中


黒影金の暁闇1~8
うこんのぎょうあん
破妖の剣6
前田珠子
イラスト／小島 榊
破妖刀に選ばれし少女よ…
愛と正義のために闘え…！
死闘の末、ついに妖主を倒した破妖剣士ラス…！
しかし実父の配下に命を狙われ、紅蓮姫奪還チームに
追われたラスは闇主と共に逃亡するのだが…!?
好評発売中
コバルト文庫


破妖の剣 外伝
珠玉の超ファンタジーに酔いしれよ!!
言ノ葉は、呪縛する
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトの秘密を知ったリエンカは…!?
紅琥珀
異形を仮面で隠した人々が棲むアルバワヌの里で、逃走中のラスと闇主は…!?
前田珠子
イラスト／小島　榊
好評発売中 コバルト文庫



コバルト文庫
好評発売中

本好き少女の
波瀾万丈ファンタジー！

前田珠子

イラスト／明咲トウル

天を支える者

天を支える者1～4
天を支える者 古戀唄1～5
天を支える者 罠は、蜜の味

天を支える者 緑風に誘われ
天を支える者 緑の糸をたどって
天を支える者 緑蘿の檻に囚われ
天を支える者 緑玉の枷に繋がれ
天を支える者 緑の鈴を、振る
天を支える者 空に響く緑の鈴音

コバルト文庫　雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の書き手を目指す方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人発掘の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!?

大賞入選作　正賞の楯と副賞100万円（税込）

佳作入選作　正賞の楯と副賞50万円（税込）

ノベル大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿95枚～105枚。
【しめきり】毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Cobalt』1月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区二ツ橋2－5－10
（株）集英社　コバルト編集部「ノベル大賞」係

※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる**「ノベル大賞・読者大賞」**（読者大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】400字詰め縦書き原稿250枚～350枚。
【しめきり】毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】男女・年齢・プロアマを問いません。
【入選発表】締切後の隔月刊誌『Cobalt』9月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ紙上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】〒101－8050　東京都千代田区二ツ橋2－5－10
（株）集英社　コバルト編集部「ロマン大賞」係

応募に関する詳しい要項は隔月刊誌Cobalt（2月、4月、6月、8月、10月、12月の1日発売）をごらんください。

9784086015219

ISBN978-4-08-601521-9

C0193 ¥505E

1920193005059

定価 本体505円＋税



コバルト文庫

この世界の瘴気を浄化する女神の眠りを守るため生まれた「聖石の使徒」たち。そんな彼らを導く師匠コンビ、カーラとセイタマールの過去の物語。性が未分化だったカーラが遂に女になってしまい、セイタマールはコンビ解散を決める。しかし、『玉響』に魅せられた謎の男にカーラが攫われ、セイタマールは救出を試みるのだが…!? 悲劇を乗り越えた先に救済が!? お師匠様編、感動の完結！